# 古今和歌六帖

六

830
181

帝國圖書館藏

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

# 古今和哥六帖第六

830
6
181

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

帝国図書館蔵

# 古今和歌六帖第六

## 草

春草　夏乃草　秋乃草　冬草
下草　ふゝ草　雑の草（六イ　秋乃草　手向草　さしもくさ　おかの草　かくれくさ　まろ草　神のこ草　神の草）　山吹
なてしこ　姫萩　女郎花　もくさ
志のすゝき　萩　蘭ふ　菊
ふちはかま　こゝらう　りうたん　さゆり
くさふ　はちす　かるかや　かや
はらを　かきつはた　あさかほ　荻の葉
あし　むし　めくるき　稲のなえ
はまし　うき草　流れ草　さとゝ草

大正
12. 4. 25
購求

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

しのぶ草　わすれ草　をぎ　なでしこ
まこも　むぐら　むろ　くず
はちす　あさがほ　あさぢ　はまゆふ
はたすゝき　かるかや　ふぢばかま　はぎ
すみれ　をとこ花　ところ　ゑぐ
ゆり　あゐ　まきのは　むぎ
山たち花　をけ　はく　あやめ
ひしくさ　よもぎ　しば　こけ
しのも
虫
むし　せみ　夏虫　こほろぎ

まつ虫　すゞむし　ひぐらし　かへる
はたをりめ　てふ　ひを
木
木　しらき　さかき　椎花
まつ　かへで　竹　たちばな
梅　紅梅　柳　桜
かにはざくら　花ざくら　山ぶき　庭桜
むさくら　桜　さくら花　あべたち花
しひ　はなあふひ　ゑのき　やまあゐ
とく　ほとゝき　かへるで　くぬぎ

（和名万葉日本紀）

まき
かつら（の木）
はゝそ
なし
まゆみ
ゆつるは

# 鳥

とり
はと
ちとり
さき

むろ
あふち
かしは
岩つゝし
しきみ
かつら
をしとり
うか
呼子鳥
きゝとり

桂
かし
かつかし
ひさき
あせみ
はまく
ほとゝきす
鶯
しゝき
かりかり

かへて
くぬき
なゝかまと
くえ
ぬるて
さかき
かひ
郭公
からす
かさゝき

もゝ
くひな
はまちとり

春草

万十
春草のしけき我恋大海のかたゆく浪のちへにつもりぬ

家　拾春
野へみれは若菜つみけりむへしこそ垣ねの草も春めきにけれ
貫之

家集
今よりや野辺にいててみれは若草のねのめもはるに緑なりゆく
みつね

古今一　忠岑
忠岑集
春日野の雪まをわけて生出くる草のはつかにみえし君はも（八古）
たゝみね

伊勢　業平　新古今一業平
うらわかみねよけにみゆる若草を人のむすはんことをしそ思
なりひら

未考　古今　秋のゝにみたれてさける花の色のちくさに物をおもふころかな
春くれは小草も野辺のまゝにしけりゆく草にものをおもふ比かな
二[illegible]

家ゝ　万十　門　家　家六帖　門 古恵四 行能　未考　古今名 忠岑 家漏之

（新古春上 忠見）
やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日にまかせ
たらなん

夏の草

人ことは夏野の草のしけくとも妹と我としたつさはりなは

このころの恋のしけくて夏草はかりそくれともおひしくこと
しけゝれ

（新古恋一）
道のへの下にしけれる夏草のふかくも君を思ふころかな
見しれす

（新續古夏 行能）
しけりあふ日影もみえぬ夏草は秋そあまたにふしの
かきわけて行人もなき夏草はわけつる人の跡たにもなし

人こゝろ秋にあらねと夏草の花さへもなくかれはてにけり

夏草の上はしけれる沼水の行方も知らぬ我心かな

---

家六帖　家百首中　未考　万十三　後拾下 元方　日秋中 伊勢 伊勢集　門秋下 読人しらず

すゝしさはゆふくれまつ夏草はあれたる宿をしけくあはれと
おもふ

（後拾夏）
夏草は結ふはかりに成にけり野かひし駒やあくかれぬらん

夏草の茂みのよひとは侘しくも秋の蛍のほかゆるにも

ちはやふるまてぬるこゆへやせし夏野の草をぬらしつゝ
嫁の草よ
元方

石上ふるの草も秋はなをあらしにもまた

心なき身は草葉にもあらなくに秋くる風にうたかはるらん
いせ

いつまてか野辺に心のあくかれん秋の花さへちりゆくを見む

第二右 秋野己出 古今二 貫之集 貫之

旗すゝきちくさにさける花乃名も見えて招く袖とやなれる

万八

かみさひといなにはあらし秋草の結ひし紐をとくはかなしも

未考

心みにあるらんはたはかくしても紙草のかよひしかはそれそかし 紀

家 第二右 大事行己出

かれ草

第の杜のかれ野へといひしやかれぬ草さへ人のまつらん つらゆき

みつね

古今 家家 古今 宗于 家第二右 山里己出

新まくらあはて千草のかれゆけは人はしらしと思ひしも
山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

未考

思ひわひ心のうちに草の枯ゆく人はあるなかりけり

下草

人まつ

万十一

わか宿の杜の下草かれし実とまたれぬ草よ思ひつる哉

---

未考

桜麻乃苧生乃下草はやくおひは妹かした紐とかさらましを

古雑上 読人不知 第二右 妻己出 小町

大荒木乃杜の下草老ぬれは駒もすさめすかる人もなし

万四

我宿の夕陰草の白露のけぬかにもとなおもほゆる哉 笠女郎

みつね

家第二右 妻己出 後雑二

人はかくたのむ大荒木の杜の下なる草のみなるへきかは

万十一

ゆくすゑ乃井手乃下草露あらはあかしていゆけはゝはしるとも

万七

あさかほの日かけの下草かるかやのしらぬ人をや思ひわたらん

にこくさ

万十六

いつしかとまつとし草のにこ草のねもころ君をおもひわたるか

万十一

あしかきの中のにこ草にこやかに我とゑみして人にしらるな

门卄　須成和三弐　万七寄藻　末考　万二十　万一又九　河嶋皇子　或山上憶良　以下四首並末考

旅人のみちの河辺のみ草なれましかしも貫か[illegible]らぬ　ちと万

雑の草

塩みてゝ入める磯乃草なれや見らくすくなく恋らくの

○ねるし草よ　以下九の歌ハ惣標の下よ[illegible]　二首ハ[illegible]　おほき

わかよしもちふたあやなれるをなかれやせまし　家の　かなぢ

○もとよ草よ

ちとせふる家はしらずのまつのうへにいくよ世経へるまで　ぎ万

手向草よ　[illegible]

新古雑二河嶋皇子

白波乃濱松かえの手向草いく世までにか年の経ぬらん

○はしも草よ

あらたまのやまのみは山乃さしも草よそのみなとのよりさりこて

万十四　末考　门　万十一

此あらん心かくこそ清しも草よなみちのほとりにしもやまひとれ

たつねよりつるみ山乃さしも草よ清しよそにみなそやはあらぬ　ち万又廿八

よもつまやまふあかの原清しも草よそのみちのよ身になや思ふらん　新古秋[illegible]　新千載雑下[illegible]

○おもはぬくさ　人まろ　万三[illegible]

かんつまのいなの原の秋かぬ草よ会ふまでよりの今はまされ　莞和名

○つまくゆかくさ

すゐけるみ跡くらくれのかくも草よ浦まよそてらしと行　江蒲和名　たえ

○流連形草よ　黄連和名　かくまくさ　[illegible]　信[illegible]

よし浦へうなみなみんかつまの田の池よ生てよつまもの草

○よる草よ　人まろ

しるあしよその連ても草よあしみるくんしさあかふ紙さるべし　藺　鷺尻刺和名

国立国会図書館　　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

万十四
櫻流花草よ
（ときつきの）見んうきおる程つゝ亭あるにて花は我恋ゆるも
此歌見
くちなしのおのあさぬ花程しなる家に作るの名も我散るれ

同十

山ふき

古春下 読人しらず
今もかも咲匂ふらん花橘のこしまの崎の山吹の花

同 同
山ふきはあやなゝ咲そ花見んと植ゑけん君かこよひこなくに

万八 厚見王
新古春下 厚見王 五句の目録 後ろ
ちはやふる神南河に影みえて今や咲らん山吹の花

未考
折てとも見えぬ折そとこそん吉野川の底にて咲る山吹
貫之

家
うつる影あらしと山吹の瀬には庭の水をそみえし山吹の花

古春下 読人しらず 注 橘清友
中五句今作甲斐之
蛙なく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

出新 宮内侍集 馬内侍
いはてなくあはれなる身は山吹の下にこそなけ井手の蛙は
貫之

家
後撰春下 貫之
[illegible]逢る蛙啼いて山吹の花かはる[illegible]今やちるらん
ゆかりとも[illegible]あ[illegible]山吹の蛙の[illegible]白[illegible]

同
山吹の花いろいろに咲てこそ[illegible]
流てゆき

未考
[illegible]

家 古春下
吉野川岸の山吹吹風にそこの影さへうつろひにけり
みつね

家 古載
夫木 巻十六 家集
春ふかみ枝もゆるかて井手の河そこに咲る山吹の花

未考
[illegible]山の数[illegible]山吹は[illegible]
[illegible]
夫木 巻十六 家集 [illegible]

家
未考
未考
古春下 読人不知
未考 古今作者 己上
未考
万八

後撰春下 躬恒 詞云 延喜の御時御屏風ニ 躬恒集ニ載

まちくらしなけれはいまそ花に心をやりつゝゆかん（こそあられ）

独のみなかめつゝそ井手の山吹の花はさかりにあひにける哉

いつてわれあかぬ心のしのふ山吹の花のさかりによそにみるらん

大和物語 かはつなく 玄々 康忠 橘清樹四男

かはつなく井手の里こそをしけれ独ゆかまし山吹の花

我宿のやへ山吹のちるをみてはるゝひとよみるそかなしき

はるさめに

春雨に匂へる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花

たのめこし色もうつろふよしの川そこにかけさへうつりける哉

つらゆき

古今雑三 山ふきのはなにさしてくへき山のかせ

款冬の花にあひてはあくともいひつくさめや山のかけにて

なてしこ

家持

新撰古今

我宿のなてしこの花さかりなりたをりてひとめみせん子もかな

ひとまろ

---

同
同
同三之上 家持
家
同
同
古秋上 素性

我宿にうへしなてしこいつしかも花にさかなんよそへつゝみん（まきし 万）（なそ 万）

後 わか宿の垣根にうへしなてしこは花にさかなんよそへつゝ見ん 今の為れ

我背子か宿のなてしこちらめやもいや初花にさきはまさるとも

なてしこはその花よりも秋の野にあまたもさきてあさ日にさかん

貫之

拾雑夏

後夏 とこなつの花をしみれはうちはへて月日のかすもしられさりけり 読人不知

床夏の花をしみれは打はへてすくる月日の数もしられす

としゆき

なつけくは秋をまつてそ散へきをそのまゝとこなつの花

貫之

かくるとも見えぬ宿をもとふへきにとことはにさく花をしそ思ふ

古今

我のみやあはれとおもはんきりきりすなく夕かけのやまとなてしこ

素性

古今、新撰 新撰集 深く
家六載
家
日
伊勢集載し 家六載
古今 読人不知

朗詠 六載
塵をたにすゑしとそ思ふ植しより妹とわかぬる床夏の花
さきし 古 朗 古今 新撰 五人ハ咲
みつね

妹とわかぬる床夏の花を遠くへたてゝ人はかくまてとせし
そを 言
いせ

於友 家集 くる
いはくらにあとはすゝめと我宿のやまと撫子誰か植しま
いせ

伊勢集云 右きみのこゝろそしこゝろかはるとて
あきうらむとも流れて撫子のなかれゆく神の名にこそはあれ
とふ
むねゆき

我袖にうつらむまてもやまとなてしこそこの花
うゆく 伊勢集

あな恋し今もみてしか山かつのかきほにさけるやまと撫子

朗詠 納涼之
すゝしやと草村ことに立よれはあつさそまさる床夏の花

---

家六集
家 古秋上 萬
家六載
貫之集載之
万八
日

いつとてもみる我宿に植し花の色はかくやあらぬ
友 官
さくらハきつりしさくらみ 家集
めく めく 官
萩か花
こゆき

秋萩の花咲にけり高砂のをのへの鹿は今やなくらん
よひのや鹿の声
とし行

信官
古今入萩ニ書
白露のきえかへるまてまよ散てぬるしものすかる
とそし こ
女乃清ゝとよ代める
ゆ

於雑秋 女郎花よかく行り
秋萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする
足 家 於
家持

万意四 読人不知
わかやとの
我宿の萩の花さく夕陰に今もみてしか妹かすかたを
日
日みつゝしても妹をこふらしもろみ 言
やかもち

我やとの一村萩をおもふ子にみせすほとほとちらしつるかも

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

ゆけのおほきみ

円

をりてみはおちそしぬへき秋萩のえたもたわゝ（とをゝ万）にをける白露

古秋上 読人不知 注人丸
万十

人まろ

（拾雑秋）夜をさむみ衣かりかねなくなへに萩の下葉も色付（うつろひ古）にけり

円 注奈良帝 円

ならのみかと

萩の露玉にぬかんととれはけぬよしみん人は枝なからみよ

家持 五首

花[illegible]あまる[illegible]萩の下葉を[illegible]

妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉[illegible]露[illegible]らん

[illegible]萩[illegible]の下葉[illegible]の妻[illegible]

[illegible]の[illegible]萩の[illegible]

以上五首 並家持

玉[illegible]萩の下葉[illegible]露の[illegible]

古秋上 躬恒

みつね

秋萩のふるえに咲る花見れはもとの心はわすれ（古）さりけり

万二 弓削皇子

ゆけのおほきみ

我背子（わきもこ万）に恋つゝあらすは秋萩の咲てちりぬる花にあらましを

円八

大伴坂上郎女

妹かめをはつみのさきの秋萩は此月ころはちりこすなゆめ

後秋中

[illegible]

いく世へて後[illegible]の秋萩み[illegible]（かく月後）[illegible]

古恋四 読人不知 千古抄 読人已出

宮木野のもとあらの小萩露をおもみ風をまつこと君をこそまて

[illegible]の宰相

新古今集

家二貳

家二貳
古今集貳く

家二貳

同

拾雑下
白露はうへよりおくをいかなれば萩の下葉のまづもみづらん

[illegible]

浅緑しもとてまさる秋は秋は下葉やまづうつろふらん

忠岑

後秋上忠岑
秋萩の下葉におけるしら露は鹿の涙やたまとぬくらん

人まろ集

拾新下忠岑さきの伊衡
秋萩はまづさす枝よりうつろふを露の心とおもはざりけん

貫之

貫之集
秋萩の下葉につけてめにちかくよそなる人の心をぞ見る

和せい

秋まつの白露おける枝ふしてあはれとも人やいふらん

伊勢

家

拾秋
朗詠萩
うつろはんことだに惜しき秋萩ををれぬばかりもおける露かな

女郎花

万十
手にとれば袖さへにほふ女郎花この白露にちらまくをしも

古雑体 僧正遍昭 家
秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時

左大臣（時平）

古秋上 貫之
女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらん

つらゆき

家 古秋上
後古秋上 左贈太政大臣家前栽合に女郎花を読人
誰秋にあらぬものゆへ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ

三條の右大臣

古秋上
下の新古今
秋ならであふことかたき女郎花天の河原におひぬものゆへ

同 業方
古秋上
同
後秋中 家ノ載
古秋上 家ノ載
後秋中 業方

をのゝよしき
女郎花おほかる野辺にやどりせばあやなくあだの名をやたちなん
かねみのおほ君
女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたる宿にひとりたてれば
僧正遍昭
なにめでておれるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな
貫之
女郎花[illegible]
つらゆき
[illegible]女郎花[illegible]
貫之
[illegible]女郎花[illegible]

---

後秋中 二ニ了並家ノ載
家
同
同
家ノ載
古秋上 新拾 新撰集
後秋中 家ノ載

白露の[illegible]女郎花[illegible]今宵[illegible]
よみ人
女郎花[illegible]
よみ人
[illegible]女郎花[illegible]
みつね
女郎花[illegible]秋の[illegible]
（[illegible]ふきすぎてくる秋風はめにはみえねど香こそしるけれ）
妻恋ふる鹿ぞなくなる女郎花おのがすむ野の花としらずや
みつね
七夕に[illegible]花[illegible]女郎花[illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181
ガラス使用

家
古秋上　家遍昭　菫万下
後秋中　家
古秋上　平貞文
家　後秋中　読人不知
新撰集
後玄四

見ゆよ

[illegible]月[illegible]

[illegible]

人の見ることやくるしき女郎花秋霧にのみたちかくるらん

たゝみね（興風）

[illegible]女郎花[illegible]花[illegible]

花にあかて何かへるらん女郎花おほかる野へにねなまし物を

素性

[illegible]松虫の下に[illegible]

[illegible]

[illegible]人に[illegible]女郎花[illegible]

後秋中　枇杷左大臣
伊勢集同
同云　家同
古秋上
躬恒
古物名　家漏し
家二　後秋中　読人不知
同　同

をみなへし折ける袖乃ふしことに過にし君を思ひ出やせし

伊勢

女郎花おりもおらすもいにしへをさらにかくへき物ならなくに

[illegible]

女郎花うしと見つゝそ行すくる男山にしたてりと思へは

白露のおける朝の女郎花花にも葉にも玉そかゝれる

貫之

於雑秋
小倉山峯たちならし鳴鹿のへにけん秋をしる人そなき

[illegible]

秋の野の[illegible]女郎花[illegible]

をみなへし花の心のあたなれは秋にのみこそあひわたりけれ

万十 人丸集　作者未詳

## すゝき

人まろ

（新古秋上人丸）さをしかのいるのゝ薄はつをはないつしかいもかたまくらにせん

（秋相聞ノ歌）わか宿の尾花か上の白露をけたすて玉にぬくものにもか

かなむら

いかこ山野辺に咲たる萩みれは君か家なる尾花しおもほゆ

[illegible]くゆき

人皆は萩を秋といふよし我は尾花かすゑを秋とはいはん

おなし人

花薄[illegible]袖[illegible]

おなし人

[illegible]秋のゝ[illegible]

---

おなし人

まねくとて[illegible]花薄[illegible]

おなし人

いはてそも人やかゝらん花薄[illegible]秋もほには出さん

みつね

[illegible]野辺[illegible]花薄[illegible]袖の[illegible]

君と[illegible]人もあらて[illegible]風になひく花薄見てやかへらん

ありはらのむねやな

秋の野の草の袂か花薄ほに出てまねく袖と見ゆらん

伊勢

（伊勢集 秋の野の花すゝき[illegible]）

[illegible]野[illegible]花すゝき[illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

古今五　枇杷左大臣
伊勢集

花薄我こそ下に思ひしかほに出て人にむすはれにけり

日 哀傷　三春有助

君か植し一むら薄虫の音のしけき野辺とも成にける哉

大和物語 [illegible] 女

い[illegible]風[illegible]花薄[illegible]

新古秋上　読人不知
朗詠 秋晩　貫之

小倉山ふもとの野辺の花薄ほのかにみゆる秋の夕くれ

ふかやふ

続古秋上　深養父

花薄[illegible]

古秋上

貞文

今よりは植てたに見し花薄ほに出る秋はわひしかりけり

万八

後撰秋雑上　読人不知

日置長枝娘子

ひおきのなかえのをとめ

あきつけは尾花か上に置露のけぬへくも我はおもほゆるかも

しのすゝき

[illegible]

---

日

めつらしき君か家なる花薄ほに出る秋のすくらくおしも

波奈須為寸 万

人まろ

日七　作者未詳

妹かりと我かよひ路の篠薄我しかよはゝなひけ篠の原

未考

我妹子にあふさか山の篠薄ほには出すも恋わたる哉

日

旗[illegible]

日

[illegible]

[illegible]

たゝみね

後撰秋上

いは[illegible]萩[illegible]

日集 吹風の[illegible]萩の葉の[illegible]秋は[illegible]

よみ人

拾秋

荻の葉のそよく音こそ秋風の人にしらるゝ始なりけれ

つらゆき

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

赤人集

後撰四 中務集　中務

未考

口

後秋上　読人不知

未考

日本後紀十七

口

萩乃露にさくる尾を妹こあらん[illegible]連

秋風乃吹きまつとても色こそあらぬ萩の[illegible]

朝な夕なにそ[illegible]

おとろへや[illegible]秋風乃[illegible]萩の露[illegible]

いとしめて[illegible]宿ハ萩の[illegible]風の絶しさ

秋風の萩は露をも[illegible]

萩[illegible]乃[illegible]そ

[illegible]藤袴[illegible]乃[illegible]

[illegible]

わ人乃心乃まゝに[illegible]

こゝゆき

（日本後紀曰大同二年九月乙巳幸神泉苑琴歌間奏四位已上共挿菊花于時天皇太子頌歌之）

（後紀云群臣代拜万歳物五位以上衣被）

---

家　古秋上　敏行上

古秋上　家

古秋上　家

赤人集

古雑体　棟梁

素性集　古秋下　素性

なに人かきてぬきかけし藤袴くる秋ことに野辺を匂はし

貫之

宿りせし人のかたみか藤袴わすられかたき香に匂ひつゝ

素性

ぬししらぬ香こそ匂へれ秋の野にたかぬきかけし藤袴そも

（中務集紅梅家の風によひ[illegible]色まされ[illegible]）

よみ人

[illegible]藤袴[illegible]秋の[illegible]

秋風にほころひぬらし藤袴つゝりさせてふきり〳〵すなく

きく

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千とせを我ハ経にけん

素性

门 伊勢 家
家 古今秋下
古秋下
後撰秋下 読人不知 家不載
古秋下 家不載
家不載

大和物語
植しうへハ秋なき時やさかさらん花こそちらめねさへかれめや

としゆき

朗詠菊
久かたの雲乃上にて見る菊ハあまつ星とそあやまたれける

すかはらの朝臣

秋風の吹あけにたてる白菊ハ花かあらぬか波のよするか

貫之

吉野河岸にて咲る菊乃花さかりならねと匂ふなるれ

よみ人

ぬれつゝもかへて菊は花の色もさかりとそ見ゆる

よみ人

月影も菊の所見ゆる夜ハいつまて折てかさゝんとそ思ふ

家
貫之集不載
貫之集

清ゆき

冬さむみすめる月影にうつる霜ハ白きくの花

後撰秋下 貫之 詞書云 延喜御時 菊合
うつろふと見えける折の菊の花さけるとそみる清きかさし

新拾秋下
いつまてか花とハいはん長月の有明の月にまかふ白菊

貫之

うつろふも冬そ見えける菊乃花緑や心紛ぬまて散らん

風雅 貫之
霜ふる緑の花そ人の色とそ世にある菊の花いつまてか猶ちるまて

つらゆき

ゆふ法人のかくる花紙宿乃菊の開とも成ぬれはなる

いくよかてあつめまた綱にも菊乃上なる露の白玉

みつね

古秋下 家漏　家三二中　門 三二中　家載　家　家載　家三二中

朗詠菊

心あてにおらはやおらん初霜のおきまとはせる白菊乃花

おなし人

新勅冬　延喜十三年十月十三日内裏の菊合に[illegible]

菊乃花[illegible]今まて[illegible]霜の[illegible]

おなし人

秦十六 今日 延長十三年十月内裏菊合 秦

初時雨ふりそめしより菊乃花[illegible]

月影[illegible]白菊ハ[illegible]

秋元

朝[illegible]菊乃花人の[illegible]

みつね

菊乃花[illegible]人の思ひ[illegible]

[illegible]菊乃花[illegible]

是則

家載　家 古秋下　門 拾万　古秋下 古文　後秋下 [illegible]　家　家載

新後古秋下

波とのみ[illegible]見つる住江の岸に[illegible]菊[illegible]

ゆ新後古

おなし人

一もとゝおもひし菊を大沢の池乃そこにも誰か植けむ

ちさと

植しとき花まちとをにありし菊うつろふ秋にあはんとや見し

おなし人

秋をおきて時こそありけれ菊乃花うつろふからに色のまされハ

[illegible]

伊勢

秋乃[illegible]

下句ハ此花開尽更無花といふ句の心をかりて入られ

菊[illegible]人しらね

以上四首[illegible]漏
未考
後葉五 源[illegible]

かねすけ

さ月て雨ふりゆうはや菊の花はゝしやあをらん
たすし人

新拾同六三 延喜十三年菊合
あさしも袖よさりけり神な月時雨ふりにし菊はあれなまし
これのり

新拾冬
の 野 新拾 夫木 同
さく花は冬の野の風ちりませてきみやきみはなかくらん
たすし人

続後拾 秋下
わきかこら続後拾
延喜四年内の菊合
秋ならてひともタされのきく乃花ありもせぬ秋の色をみるらん
すれく続後拾
花続後拾
こきひし

延喜十三年ろ夫木
ろ丸
常宮
むら菊はさくはひさし百敷はうつろく折ゝ色かをかほるらく
きくの花 夫木十六
のと夫
ゆか夫

花くはしなきまとも川さとれはかくの花も菊
来とくてうらふくのつれなくのきくゆかれハうつろひける菊をかそへてつるりける

---

未考
同
同
古秋下読人不知
家
古物名 友則
家
未考 但物名之

象ひさしきさわはゝてゆをゝこく代つゝ名残おくまほゆか
冬しもにおきまよふ菊をはもしうつれるしもゆるらん
行 官
よ川な 作
大伴四綱ハ万葉ノ作者之今ノ歌ハ古ノ時ニ非ズ歟同名在ケルカ

白雲のたへまにうつる菊なれはいくへもまさる花とそみゆる

いろかはる秋のきくをは一とせにふたゝひにほふ花とこそみれ

くさ乃かう

菊のかうをかゝるみち露ハ心をそめし枯野なりけり
伊勢

きちかう

秋ちかう野はなりにけり白露のおける草はも色かはりゆく

雄の月ちかうてほと見えし川ろは露ようつろはんかも

をみなへし

古物名　友則
家
家六蔵
门
家六之四七物名
未考　但物名
日

わかやとの花ふみちらす（しだく　古）とりうたむのはなけれはやこゝにしもくる（もくる　家）

つらゆき

花しあれはかゝりてすまん松風よ波もちよりふ（ひ）ちのうらま

伊勢

冬かすみ露のうらゝかにいてまさてもみさるから秋の色かも

おなし人

風さむみなくかりかねのこゑよりそおもひにくる衣まつや野（さ　家　新和）（新和雅）

しをに

秋の野乃草は色と人もをりかきをみさのまゝ見て瀧小
ちりぬまて川を見をへてるをふくまつ花のさも

いせ

---

家　物名
家六蔵
门
古物名読人家
未考以上七之物名
古物名　僧正遍昭
家
家六蔵　但物名

うきむる袖をにくめるきとめは瀧の瀬乃数はこそあり（と家　とめし新和　新和雅）（玉　新和　正）

つらゆき

咲そめて今はあしとおもひしをにくゝれても月はさかりける

きくもをし咲おもはれとちれはそれはなれもをまれはいかゝ

たれし人

みやひくいまさかりの花さんとこゝをはひそ梅乃はなさく
むしきたのさくあめのつと流れてさへかはらぬくはひにめてき

くたに

ちりぬれは後はあくたになる花をおもひしらすもまとふ（てふ　古）哉

つらゆき

わかとを山さくおつる瀧つせのしはしのこゝろそらく音をも

古物名 貫之 貫之集ニ載
以上二首 未考
万十四
第二帖 冬 野ニ出
未考

さうひ

我はけさうゐ（ひイ）にそみつる花の色をあたなる物といふへかりけり

かるかや

まめなれとよきなもたゝすかるかやのいさみたれなむしとろもとろに

古今まめなれとなにそはよけくかるかやのみたれてあれとあしけくもなし

秋風にまねかれわたるかるかやを親れ流てゆくすゑもなし

かるかやのつかのまもなく物をおもへはまたいく草をかりつゝ

夫木十一刈萱部 読人不知 六帖 秋風にみたれてなひきかるかやの

かや

ひとのわしるきるやかやまくされはゝくゝくとま出にけり

可也乃山 読人不知

かやの野へいてもとむるの峯のうへなくともはふくし地を

かぬるにかやはかり身のいくへやくにふひをつけくやとつる

をちか

拾遺集 読人不知 六帖 今案 浦 の花 ひ

万十六
未考
同
夏
古今 夏
未考
同
万七

久かたの雨もふらぬかはちすはにたまれる水の玉ににむ見ん

信 中にうかふらむ玉となる

けふ見れははちすにとまる露のむすほゝるゝ人の心とくらむ

みちのくをおもひかへしはまたき蓮葉の露のたまくへのあかなとかや

伊勢

ふかき江はいくふかゝるあさ蓮にやとれる浪の蓮まへこれは生けり

へせう

遍昭

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく

吹風はゝとのをそよくか秋やとの池乃はちすに浪そゆるなれ

露をなそ玉となしつるはちすはにけるわれをとひてこそみや

かきつはた

拾遺集 春下 読人不知

住江のあさゝはをのゝかきつはた衣にすりつけきむ日しらすも

後文　万十　同十一　家　同朗詠集　同　万七

良岑のよしかた

いひそめしむかしの人乃杜若いろはかりこそかたみなりけれ（やと 後）

我のみやかく恋すらんかきつはたにほへる妹はいかにあるらん

かきつはたにほへる妹をいさゝめに思ひいてつゝなけきつるかな（きミ 万）（つるかも 万）

清ゆき

（朗詠隣家）
君かやと我宿わくるかきねをはいろかはらぬ時そしらるゝ

夜半

たゝみね

むつましくかこひへそぬりきつて雉かまうたうつろひめくる

文

清ゆき

うちにくく君か出しこむかきつて風をひかて峨かひかす

なかなか人はなら山のおきつゝのうきつらさをしのみして

国

---

古今伊勢物　家　万十一　未考　同やまとものかたり　未考　万四　未考

なりひら

三とせまてなれはしはしわれやすらうてきぬる猿とこそ思

あつも

わか世こそ恋てあれはかわこともいひそれてあへきものと

吉野のあさう沢人乃まこもも草のをうしのとふやうきて

よそにこそ井みてかくらしけの池乃こともかとは川あけやさん

これ枕とも世のよとかたこともの秋いかてそ思へともむ

おほえものをかさ

わさとこよひなれはるやかうことの乱て我よえならぬかくらて

はつゆき

頼むなら山のかたこもかけまてにゆくよもみてはむかはん

はつゆき

古今
同
万四
古今
古今四 読人不知
古今
古今二 貫之
貫之集

みくぬのうらやこきこれおきつけてゆかてよるかな新かなりけり
五月まつぬまふ生るわかこものうよく我をいそとろへふ
これゆき

女郎花さく沢に生る花かつみやこもしらぬ恋もする哉
（俊頼の枕云こもとハかつみといふ　又云こもの花とハてふかつみといふ）
かつても　万葉　都も

こさこりの八重山ふきのむつかつみかつみる人に恋しかりけり
かしの万

みちのくのあさかの沼乃花かつみかつみる人の恋しきやなそ
あさかの沼の花かつみかつみる人に恋やわたらん　古

あし

芦はのつのくむしほとよ天地と人さのしれいまそまなはなり
日本紀竟宴
丹ゝろく

津のくに乃難波のあしのめもはるにしけき我恋人しるらめや
新千載
そこともしらぬ

人しれぬ物もふときハ難波なる芦のしらねのしたにこそなけ
次の哥ハ後撰読人不知とあり
そこもとへ

徒らゆき

---

古今 家
万十
家
万七
古今
万十六
万七
古今

拾遺雑下読人不知
志波のよすれハなひく芦の根乃うき世の中ハみつからなれ
とうてうかあしき　拾遺撰

をしてるや難波ほり江のあしへにハかりねそしつ霜のふるよ
ねしらし　万

徒らゆき

新古雑中 貫之
難波めの衣ほすとてかりてたく芦火の煙たゝぬ日そなき

むし　　　人まろ

君かためうきぬの池のひしとると我そめし袖のぬれにけるかも
の万　万七

あふみくハうつろほうこの池に生ひしのしたねのあかれゆる千里
とゝく　大和　近江

とよ国のきくの池なるひしのうれをつむとや妹かみ袖ぬれけん
つむ万　ぬれん万

ぬなハ　　　人まろ

我こゝろゆさのたゆさにうきぬなハへにも沖にもよりかねつましし
かてまし　と万

こ里ほのこかゝ江に生るぬなハくるゝ人のこゝろさしよ物とおほゆ

家　古雑体

未考

日

新勅撰池云

日

未考

家

ねぬなは　　たゝみね

かくれぬの下よりおふるねぬなはのねぬなはたてしくるないとひそ

くるしきもつらきもしらすねぬなはのねぬなはの［illegible］

山しろのいはたの小野のねぬなはのくるしかりけるあはぬ恋かな

恋すれはますたの池のねぬなはのくるしかりけるわか心かな

おなし

ゆるかにもますたの池のねぬなはのうきよやつらき

うき草　　人まろ

ひとりねのおもひはつきすうき草のみちきてわれはたのみけるかな

伊勢

根をたえてうきたるくさは池の［illegible］

---

一万七

古秋上　読人不知

以下三首　並未考

未考

新勅撰恋五

家　古雑下

万代十二恋四

小野小町

わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとそおもふ

これ

水の面におふるさ月のうき草のうき事あれやねをたえてこぬ

こもり江にひまなくしけるうき草をかきわけて人はこぬかも

はちすくさ

月草にころもをはすらん朝露にぬれてのゝちはうつろひぬとも

つき草にうつし心はいろかはる人のこゝろのつねならぬかな

むかしより［illegible］

月くさに衣はすらむ［illegible］

古今五 読人不知
第五帖色巳出

よの中の人の心はゝさくされうつろひやすき色にそありける（花染の 古 本万治）

万十

はよるはさきに夕へはきゆる月くさのきえぬへき恋も我はするかな（あした万）（けぬる万）（かも万）

同

朝夕に咲すさひたるつき草のひたくるなへにけぬへくおもほゆ（露万）（ひくたつ万）

わすれ草　　　　つらゆき

古今四滅歌 貫之
家ニ載

道しらはつみにもゆかむ住の江のきしにおふてふ恋わすれ草

すみの江に年へてすみし忘草人の心にいつそ生まし

土左日記

おなし人

墨江に舟さしよせよわすれ草しるしありやとつみゝゆくへき（て左）（く左）

家

おなし人

打忍ひいさ住の江へ忘草わすれにし人のまたやつまぬと（於雑上読人不知）（の家）（し家）

たゝみね

---

新撰集ニ載
古雑上 忠岑
忠岑集ニ載

住よしとあまはつくとも居すな人忘草におふといふなり（なかゐすな古）（おふといふなり古）

後恋三 在谷雄

わするめはいふかひもなし忘れ草わするはかりの恋にしあらねは（わすれぬの中物え）

未考

忘草たねのきらはそてあふ人のこゝろにまかせさるへく

（伊勢 今はとて忘るゝ草のたねをたに人の心にまかせすもかな）

古恋五 貞登

忍ふ草

ひとりのみなかめふるやのつまなれは人をしのふの草そおひける

家

伊勢

花すゝきほにはそてもなきやとは昔思ふ人の草はのひけり（いてすもありけりやとには）

未考

こひしきも思ふてふやのはゆくさしけきまゝはとらかまし

つらゆき

貫之集ニ載
古物名 垣衣 紀利貞

山たかくつねにあらしの吹さとはにほひもあへす花そちりける（つね古）

ことなし草

（後撰恋二 人のもとよりかへりてみつけゝるにおとつれ侍らさりけれは [illegible]）

未考　家ふ載　万六　门　未考　同

[illegible]の杜りいかにと[illegible]それ[illegible]
（新古　恋　読人不知）

つらゆき

人[illegible]いはれの池乃[illegible]やまさるらん

[illegible]見[illegible]や乃ひきしらぬ[illegible]
（新勅　恋五　読人不知）

せり　左大臣橘のもろへ

はるひさすひるは田たひてぬはたまのよるのいとまにつめるせり這
（新千　春上　左大臣）

久し　薩妙
（薩妙観也）

ますらおとおもへる物をたちはきてかにはのたゐにせりそつみける

人[illegible]
（[illegible]）

春雨の[illegible]やと川乃[illegible]

なり　[illegible]

万三　万十四　作者未詳　门　门　万十一　未考　万十九　中務行在出　门四　大伴田村大嬢　家　後春下

春霞かすかのさとのうへこなき苗なりといひし枝はさしけむ
（殖子　水葱）

苗代乃こなきか花を衣にすりなるゝまにまにあせかかなしけ

かむつけのいかほの沼に植こなきかくこひむとや種もとめけむ

をとて

我宿は[illegible]君かまさぬ
（古　幹　株　生之　万）

[illegible]月乃[illegible]
（続後撰　雑中　左大臣）

むくら　[illegible]

[illegible]君の[illegible]

いかならむ時にか妹をむくらふのきたなき宿にいれまさせん
（いかならん時にか妹を　万）

八重[illegible]

[illegible]

家　万十一　未考　後秋下 家集　未考　家　未考　古恋五

たゝし人

八重葎[illegible]人めそ宿は[illegible]

竹取物語ニむくらはふ下にも年ハへぬる身の何かハ玉のうてなをも見ん

木家

なかめ[illegible]八重葎[illegible]

やと　夫木廿六

葎生てあれたる宿[illegible]

貫之

むかつら

新古春上

むかつら葛城山の[illegible]

よみ人

新古恋三

かまてゝ[illegible]

右二首入玉鬘乃玉葛不審

いさゝ[illegible]

くもを

さらん

秋風に吹かへすくすの葉のうらみてもなをうらめしきかな

の古　うらかへす古

---

後恋二　古秋下 家集　未考　万十　同七　同十四　万二

足曳の山下しけくはふくすの尋てこふる我としらすや

かねみ王　十三宮イ

貫之

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり

かまこれて[illegible]

拾雑恋 読人不知

風やミ峯の葛はのともすれはあやかりやすき君か心か

人の

我宿のくすはゝ日にけに色付ぬきまさぬ君はなに心そも

[illegible]

足柄乃とこねの山にはふくすのひかはよりこね[illegible]

さねかつら

[illegible]

むくけみのはのうらかれて[illegible]

後撰三
なにしおはゝ相坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかな
三條右大臣

未考
[illegible]

後撰三　読人不知
[illegible]
[illegible]つゝ花

万十一
山たかみ谷へにはへる[illegible]

古今四　寵
やまかつの垣ほにはへる[illegible]

未考
絶[illegible]

あさかほ

万八　伊勢集
やかもち
[illegible]槿[illegible]

新勅撰上　読人不知
[illegible]槿の花

朝顔槿通信

万十
あさ顔ハ朝露おひて咲といへとゆふかけにこそ咲まさりけれ
貫之

家
[illegible]槿の花[illegible]

あさちら
人中経

古今一　読人不知
[illegible]

万八
[illegible]

あめのみかと

門
今朝のあさけ秋風[illegible]

門七
[illegible]

古今四　読人不知
[illegible]

未考
村雨の[illegible]道ハまだ日影のあさぢが末て[illegible]
けつゆのたまし

万八
秋萩ハ咲ぬべからし我宿の浅茅が花のいろけく見れば（ちりゆく万　京り官　き官）

同十一　作者未詳
まくら[illegible]あさぢが[illegible]人ゆるあやす我[illegible]くよ（ゆも万）

ちはな

万八
君がため我手もすまに春の野にぬけるつばなぞめしてこえませ（わけがため万）（万八之戯奴和気云ゝ）

同
我君にわけハこふらしたまひたるつばなをはめどいやゝせにやせ（わけ万　めぐ万）

同
ちはなぬくあさぢが原のつぼすみれ今さかりなり我恋ふらくハ（そめして万）

かうひ

伊勢集
[illegible]河海の奥[illegible]のよる[illegible]ハあらで（和名伊留　奥　かうひのむ　ゆるさぬ官　のしぼらる　漢次）

未考　但和名かうひ
かきくらし[illegible]つるハ[illegible]のよる[illegible]つましく

あさがほ（和名山[illegible]花あつさね）

万十
あさがほハあさ露おひてさくといへど夕影にこそさきまさりけれ（つ　と万）

未考
ほかれ[illegible]あさがほの花[illegible]
はらく
（大きの花ハうつろふものとあさがほハよひのまさけハそれてよひあさてよあり）

未考
[illegible]

同但近二物名
[illegible]
（[illegible]）

同
[illegible]
すみれ

万八
春の野にすみれつみにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける（続古春下赤人　古今序小　と）

後撰春下　作者
我宿[illegible]すみれ[illegible]

万八
山吹の咲たる野べのつぼすみれこの春雨にさかりなりけり

ふちはかま（おけ之官）（蘭葛）

万十
春日野にけぶりたつみゆをとめらは春のゝうはぎつみてにらし

わらひ

未考
こぞのゝ山乃霞をけさ見えしわらびのもえぞやけり

伊勢集
やくとめふたゝびきこえしもおくらにかはらひを焼てつむ

古物名　真静法師
けぶりたちもゆとも見えぬ草のはを誰かわらびと名付そめけん

ゑく

万十後撰上　読人不知
古六帖に出
君かため山田の沢にゑくつむと雪けの水にものすそぬれぬ

万十一
あしひきの山沢ゑくをつみにゆかむ日だにもあはむはゝはせむとも

ゆり

万八
夏のゝのしげみにさけるひめゆりのしられぬこひはくるしきものを

万十一
みちのへの草ふかゆりの後にてふ妹かいのちを我しらめやも

万七
みちのへの草ふかゆりの花ゑみにゑみしからにつまといふへしや

あゐ

万十一
人しれてこひてしぬともみそのふのからあゐの花の色に出めや

ところつら

万七
すめろきの神の宮人ところつらいやとこしくに我かへりみむ

ひかけ
蘿

万十九
足曳の山下ひかけかつらけるうへにやさらにむめをしのはむ

新万
をとめらかひかけにみる雪は花のさきにいつまたくらむ

後撰三　師尹
日影をとるひかけのかつらかけてこそ心乃色にみえてけれ

未考
人しれぬなむだの露におく山のおくのひかげてふかくさもせけり

万四
あさひかけにほへる山に照月のあかさる君を山こしにおきて

ら万
ろ
ゑ万
きみかため万
めれうし袖ひぢてとかさすや
いまも後
あし万
きぬる万
つこゆかん万
いのち今六
きものを万
いふへしや万
こもりには万
こひて万
からあゐは藍の事也さて別名のうとを今家にはなとと出るにはかはる
七万
さるろ万
冬薯蕷葛
弥常敷尓
とこ万
万葉九冬薯蕷都良これをさねかつらとよめりこれを蕷のかつら加可等の字をよむへし古今の家
ら万
さくらに万
あかさるきみを万
にほへるとは日落て入ころと不審

家 古今三　万六　同十一　同　同　同十　同十一　同　同

山すけをとれ　せきよ

我宿にうつしてハ足曳乃山した花のなのミに出あて
けのうへに雪ふるあひふる足曳の山した花そ流よつもるな（へて万）（安倍氏流 相照らう 相思そ万よりへめくとより）（ここ万）
足曳の山した花のなのミ出く紙こひんやまんかハ（ろく、すゝみ万）

すけ

三吉野のみくまか菅をあまなくにかりのみかりて亂なんとや（かも万）
足引乃山におふる菅の根のねんころみまくほしき君かも（も万）
女郎花さく沢におふる志ら菅の志らぬことをていはれし我せ（つし万）
志かのうらに根さす小菅のしのひすて君にこひつゝありかぬかも（ミなとに）（さねはふ万）（あらそやむとも 宮）
見わたせハ三室の山の岩ほすけねんころ我ハかたおもひそする
大君乃みかさにぬへるありますけありつゝ見れとことなきわきも（三宮）（こと万）

同　同　同七　同十二　貫之集　古今六　古今六

菅の根乃ねんころ妹にこふるにしますらを心おもほえぬかも（も万）（んかも 前）
おく山乃岩もと菅はねふかくもおもほゆるかも我思ひ妻ハ（ひ）（言 奥山の岩陰に生る菅の根のねんころ吾もおもハさらんや 宮 六十ニ）
妹かためすかのミつミに行し我ハ山路にまとひ此日くらしつ（とま万）（と万）（しや万）（万巳上四首人麻呂之）
人ミなのかさにぬふてふありま菅ありての後もあはさらめや（於是四人丸）（後にもあハんとそ思ふ万）

河く　天

紅條は紫もほのつるたくて足曳の山にハ雪とふりつゝそ今（貫之）（の家本）（たくさろ 玉家）
むかしはあらさりける白髪は今はよせて我かへるらめくよ（すゝイ）（こけ同 みやこゝろ 中務集）（中務集云 中務の巳かくしかやのひろろあくまへみさゝめたるけよ やくるといふこときさまろしせれハあやうちうちいき）

あまつハ

ちえやぬる神乃卯月の風にのみかよひきちて打ちてあまひのきせ（新勅撰 中納言家持）（かて家）
心あるはけ山の中ハ我るならあまかせてやまむまりかけ（於高こゝろやとあへろやまひすれあつひあつてハいく茅ある）
かゝまゝ

未考
同
同
同
同
同
新後集　寺西帖後已出新後
未考

あみとはかくくさもなかせわくらね

見くり　三稜

流くま江におふる見くりのやこ海によりて見ゆる谷の途

ゑをてらふやまの池乃みくりかもとらけハしら小池やれ有

よぬまこ

新もふかまくら霜かるかゆハ音まさる人ハ絶ぬる

声をたてゝなくぞ悲しき夜深き荻の上の露ぞまされり

穐風やまちしやどに吹ぬらん荻のつゝしく嘆こよひ

ちゝけ

と紀をわる松かかる宿とは小逢れをもまてそへ出

君おもふ心の色をいはずともなげくなかれと物いはゝなれ

---

家持集
万十一
同　寺西帖寺未遂出
万十一
同
古秋上　敏行
後秋上　読人不知

おく山の岩かきぬまのみこもりにこひやわたらんあふよしをなみ

あふことはいつそのゝもの菅乃根のねもころ法に

いちし

路乃へのいちしの花のいちしろく人みなしりぬ我恋つまを

大原のこれいちしはのいつしかと我思ふ妹にこよひあへるかも

よかも

ちる見ことゝへてあひもふかはなの茎よせ流るも

道のへのいつしハ原乃いつもいつも人のゆるさん言をしまたん

虫

秋乃夜のあくるもしらすなく虫ハ我ことものやかなしかるらん

穐風は吹ゆふひハ出ゆふさりそまつ虫を帰る

古秋上 読人不知
萬葉下
後秋上 萬葉元右
古秋上 読人不知
家蔵
家 古恋四 萬葉友
万十五
家
未考

わかためにくる秋にしもあらなくに虫のねきけはまつそかなしき（まつ 萬古）

秋くれは野もせに虫のおりみたる声のあやをはたれかきるらん（ころ 後）

あきの夜は露こそことに寒からし草むらことに虫のわふれは

せみ
すせい

秋もやゝ蝉はなきつゝなけれは風ぬ川辺る人の住山さ堺と（やとれ）

世の中を思ひもかけぬ蝉の夜をしてやん人のゆくしんとすん（ろすと 萬）（一説八 古萬 乱）

とものり

石（いえ）たゝるふしらよなく蝉の鳴をもけは我そかなしや（し 古）

いせ

咲花もちりにしよりも蝉の声あさもちるふあけろ（さくらちる 万）（とき）（て 古）（そあり 万）

今もちるほとも過てそ人のうつせみのなかさけのたつふかなしき（さかりの家）（本ノまゝ）

---

後恋五 読人不知
古物名 滋春
同 忠岑
友則集 古恋二 萬葉 友則
同 家蔵 躬恒
未考
古恋一 読人不知

うつせみのむなしきからになるまてもわすれんと思ふ我ならなくに（もと）

おもひてはよ人はかくこそ蝉の声ましまさんと思ひてそなくなる（玉忠岑 忠岑集 家）（とる）

波のうつせみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからんや（古 さ）

夏虫（又ハ火虫のこと）

宵のまもはかなくみゆる夏虫にまとひまされる恋もするかな（伊勢集 よひのまもみをはかけつる虫ハきえてや人にあひそめけん）（もする 古萬）

とものり

夏虫のしるしる火にそいりぬへきおもひにもえてきえぬへらなり（伊勢集 夏虫のしるしるひにそ入くるあそもろくわろんかゝんともする）

みつね

まかせては我そもゆる夏虫は火にいりてこそもえてきえけれ

夏虫の身をいたつらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

国立国会図書館　　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

未考
家 後恋五 伊勢
古秋上 忠房
家六帖
家六帖 後秋上 読人不知
後秋上 読人不知

よひのまもはかなくみゆる夏虫はなにゝ身をかへてわかおもふらん
いせ
夏虫のしる〳〵まとふおもひをはこりぬかなしとたれかみさらん
きり〳〵す
きり〳〵すいたくなゝきそ秋の夜のなかきおもひは我そまされる
朗詠集 素性
素性
なかなかにあきたる霜にまかせて人の[illegible]
つらゆき
秋風の吹つる宵はきり〳〵す草村ことにみたるなり
くる 後　の 後　草のねことに声みたれけり 後
秋の夜の[illegible]ものやかなしききり〳〵す[illegible]
そせい

---

家六帖
後秋上 読人不知
门
门
貫之集
伊勢集 敦慶親王
古秋上 読人不知

秋風は[illegible]蓬のやとにかゝるらし
上三 秋風やよもきのやとにかよふらんまつむしくなきまさるなり
まつむし
貫之三首
[illegible]の露に[illegible]人まつ虫の声を[illegible]らん
や 後　めり 後　詠 後　き 後
秋の野にきやとる人もおもほえすたれをまつ虫こゝらなくらん
夕されは人まつ虫のなくなへにひとりある身そ[illegible]
玉葉
[illegible]白露[illegible]
五條のきさき
伊勢集云 秋ののいとおりて[illegible]
秋の野に[illegible]虫の[illegible]
君しのふ草にやつるゝふるさとはまつ虫のねそかなしかりける
すゝむし

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181
ガラス使用

忠見集
新撰集
新古[illegible]小[illegible] 貫之[illegible]
万十
遍昭集
古恋五 遍昭
後秋上 貫之
同秋下、貫之
三巻並家集不載
同秋上 読人不知

[illegible]

人の[illegible]女郎花[illegible]

[illegible]

ひくらし

夕かけにきなくひくらしこゝたくも日ことにきけとあかぬ聲かも

遍照

今こんといひて別し朝よりおもひくらしの音をのみそなく

つらゆき

ひくらしの聲きく山のちかけれやなきつるなへに入日さすらん

日くらしの聲もいとなくきこゆるは秋の夕[illegible]なりけり

秋風の[illegible]ひくらしの[illegible]

古秋上 読人不知
古物名 日暁 貫之
貫之集不載
万十
同八
後秋上 業平
伊勢物
家集
古恋二 友則

ひくらしのなきつるなへに日は暮ぬとおもふは山のかけにそありける

貫之

松人は宿にひくらし[illegible]

[illegible]もあらん時もなかなん蜩の物思ふ時になきつゝ[illegible]

かくれのみ[illegible]いふせみ[illegible]きなくひくらし

なりひら

ゆくほたる雲のうへまていぬへくは秋風ふくとかりにつけこせ

つらゆき

夏乃[illegible]の聲を[illegible]

友則

夕されは螢よりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき

未考

家蔵

考但物名蛍

考万

貫之集

古恋五　後人の名
新古恋　不愚之出

ゆふされく秋まて人や今くるとおもふくさまても照す螢か
　　貫之
ひるなれはせみのをりはへなきくらしよるは蛍も野もせもえわたる
（古恋一　あけたてハせみのをりはへなきくらしよるは蛍のもえこそわたれ）
　　しけゆき
音もせておもふ人くもみしかくて蛍とこそもゆれ
　　ちゝなわめ
つゝめともかくれぬものは夏虫の身よりあまれるおもひなりけり
（拾秋要之）
　　くも
今そしるわかせこかくへきよひなれやさゝかにのくものふるまひ
（衣通姫の歌　わかせこかくへきよひ也さゝかにのくものふるまひかねてしるしも）
　　あさやまて

---

拾遺　秋之出
古秋上　考万

未考

未考

同

万九

家蔵

　　ふんやのあさやす
秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすち
さゝかにのくものいとすちよわけれは風ふくことにみたれこそすれ
　　てよ
たえぬへきいのちをかけて世の中にあるかなきかのくものいとすち
いとによるものならなくにわかれちの心ほそくもおもほゆるかな
　　未
あさちふのくものいかきにすむ虫のなくなくひとをこひわたるかな
　　よみ人しらす
あはれともいふへき人はおもほえて身のいたつらになりぬへきかな
　　貫之

家
[illegible]風とこそ[illegible]　伊勢

家　後春中[illegible]
桜花にほふともなく春くれはなとかなけきのしけりのみする　おなし

家
[illegible]

[illegible]

同
[illegible]

古序　王仁
なにはつにさくやこの花冬こもり今は春へとさくやこの花

家　古春下　下[illegible]
久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん　友則

家[illegible]
[illegible]雪とそ[illegible]　貫之

同
ちる花[illegible]　おなし人

古春下
梓弓春の山へをこえくれは[illegible]花そちりける

同
[illegible]の花[illegible]や　[illegible]人

後春下 家六載
後春下 家六載
古春下
躬恒集 六載
古春上 躬恒
未考
躬恒集
家六載

あさぼらけ下ゆく水はあさけれど ふかくぞ花の色は見えける

兼輔朝臣の家の池のほとりにて一夜あそびあかしてつとめて読る家集に此歌兼輔集にもあり

貫之

[illegible]

みつね

花見れは心さへにそうつりける いろにはいてし[illegible]

ことしより春しりそむるさくら花 [illegible] ならはさらなん

朗詠花

[illegible]

[illegible]

家 新 花つゝ

[illegible]

---

同
同
[illegible]
家 古春上
古春下 読人不知 素性集六載
同 同 素性集載し

[illegible]

伊勢

[illegible]

敏行

朗詠

[illegible]

素性

春ことに花のさかりはありなめど あひ見むことはいのちなりけり

[illegible]

家 古春下
門 下 ...
門 ...
是 ...
家 家集
古春下 読人不知
家
家 後秋中

おしと思ふ心はいとによられなんちる花ことにぬきてとゝめん
木伝へはおのか羽風にちる花を誰におほせてこゝらなくらん
素性

花の色は今はうつりてあらなくに...
みつね

ちれハ乃...
花は...昔は今...
貫之

桜花
見る人もなき山里のさくら花ほかのちりなん後そさかまし
いせ

やともせす植るへてそ...

---

五十
家 家集
家
門
古秋下 貫之
後秋下 門
門 読人不知
家 貫之

紅葉

妹か袖まきゝ山乃あさきりにゝほふ紅葉乃ちらまくおしも
貫之

あきもまたみぬに紅葉は立田乃山...
紅葉ゝのなかれさりせハ立田川...
...

みる人もなくてちりぬるおく山乃紅葉はよるの錦なりけり

かく...山の紅葉...
山風乃...紅葉...
...紅葉のちらん...
吹風に...紅葉...

家　同　同　同　後秋下 貫之　貫之集　後秋下　古秋下 [illegible]

風冬 貫之
紅葉ゝ散しく時ハ行かよふあとたにみえぬ山路なりけり

拾冬 貫之
足引の山[illegible]紅葉[illegible]

同
なかれくる紅葉[illegible]

貫之

玉冬 貫之
山[illegible]

後秋下 貫之
立田河秋にしなれハ山ちかみなかるゝ水も紅葉しにけり

水底[illegible]紅葉[illegible]

よみ人

から[illegible]山乃紅葉[illegible]

[illegible]

[illegible]

---

古秋下　新撰集　同　古秋下 新撰　新撰集　古秋下 [illegible] 貫之集　古秋下 貫之　後秋下 読人不知

玉雑之 貫之
[illegible]山乃峯の紅葉[illegible]

[illegible]紅葉[illegible]

秋の紅葉[illegible]

風[illegible]紅葉[illegible]

[illegible]紅葉[illegible]

[illegible]紅葉[illegible]

[illegible]

白露も時雨もいたくもる山ハ下葉[illegible]

[illegible]

[illegible]紅葉[illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

家六帖 後秋下 元方

門 興風集 興風

家 古今五

家 古秋下

友則

[illegible]

[illegible]

むねゆき

[illegible]

是則

紅葉[illegible]

万十 作者未詳

古秋下 人丸

かりかねの[illegible]から衣たつたの山は[illegible]

たつた川もみちはなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

[illegible]

人まろ

[illegible]

古秋下 読人不知

万九

家 古秋下 是則

門 読人不知 友則集

貫之

家六帖

素性

ならのみかど

佐保山のはゝその紅葉ちりぬへみよるさへ見よと照す月かけ

新古雑中 宇合

山科乃石田の森の柞原見つゝや君か山ちこゆらん

式部卿うまかひ

さほ山のはゝその色はうすけれと秋はふかくも成にけるかな

是則

秋霧はけふはへたてそさほ山のはゝその紅葉よそにても見ん

けさはなたちそ 古今 友則集

さほ山 古今

よみ人

[illegible]

貫之

[illegible]紅葉[illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

家六戲　後秋下　元方
同　興風集　興風
家　古今五
家　古秋下
古秋下　亭子院　上已出
万十　作者未詳
同八　大津皇子

友則

〻とゝく名付山の紅葉ゝはいくしほ露やそむらん

まつ村紅葉ゝ流るゝ水に浪立て秋は紅葉ゝにも花そ咲ける

むねゆき

はま成の人の宮の紅葉ゝや秋は紀の紅もわらん（うつろひぬらん　家）

是則

紅葉ゝのなかれさりせは竜田川水の秋をは誰かしらまし

人のまろ

竜田川紅葉ゝ流る神なひのみむろの山に時雨ふるらし（あすか川　古今　古今ニハ又アスカ川トアリ）（かつらきや山の秋風ふきそしくらし）（朗詠　家集　人丸　わきもこはかうらひ）

（前ニアリ　人丸ノ下　竜田川の上）
かはかぬのあるゝときは竜田川紅葉ゝみたれ（そめくさ）

たてもなくぬきもさためすをとめらかおれる紅葉ゝに霜なふりそね

---

古秋下　読人不知
万九
家　古秋下　亭子院　長月歌
同　後首　読人不知　友則集
未考
家六戲

よみ人しらず　ならのみかど

さほ山のはゝその紅葉ちりぬへみよるさへ見よとてらす月影

山科乃石田の小野のはゝそ原見つゝや君か山路こゆらん（新古　雑中　宇合）

式部卿うまかひ

是則

さほ山のはゝその色はうすけれと秋は深くも成にけるかな

秋霧はいくへもたちそさほ山の柞乃紅葉よそにても見ん（けさはなたちそ　古今　友則集）

よみ人しらず

うつらまてゝ山の紅葉ゝ見まくほしき（こそあらめ）

貫之

むらさきてゝいとわるゝ紅の色に思るゝゆゝれ紅葉ゝそまる

万八
家六載
未考
万十や
以下六そ並めし

此句より家かのうたよりそのうたの家、素性法師よりきこゆ歌ひとつにてあはつむつき

ふえて
かつやとふかりつるうきをみんするに嬉しけりつゝ前日れ
よせい
とはゝよ心はかへてたちそへんといはふなかまあさ山かれて
（後撰雑上法皇てらのうしろなる山のかへてのもみちて侍るを寺性法師このえたを手折て人にまゐらせけれはあつくはつへきさうなし）
よしかき

をくら山峰の紅葉は心あらは帰のみゆきまたなん
（拾雑秋 小倉山峯のもみちは心あらは今一たひのみゆきまたなん 小一条太政大臣貞信公）
ちかき山わかやとちかくなれそめてねんとせしをと嬉しかりそ
又ねんとおもはぬよるはおもふよりか

松

いく世へし磯乃松そむかしよりたちよる波やかそへしるらん
（拾雑賀 辺の松は家）
貫之　官
又我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫乃松いくよへぬらん

六ノ四十二

後春上 藤原雅正
貫之集
後春上　藤原雅正
後賀 第二山已出
家 後秋下 読人不知
古春上 是則集 是則
家六載 後恋下 読人不知
家 古雑上

秋の野やはなとてかのも色濃と後ちよまつの色の松
花の色はちらぬまはかりふるさとにつねには松のみとりなりけり
世中に何をかはまて雪のふりまよふ時はかれにける
大原やをしほの山乃小松原はやこたかゝれ千世の影見ん
（夫木十 松 家 素性法師 ころもしはかのみきゝてそのこのは山まつこそ松をかひろつゝ 此歌家六帖故補之）
安則　二条官
ふたつなる峯の山の松ふくかせのよそに聞くらん
あふみにもおもふ松乃なかきよをいかにせよとてのこそ
こそこゑ
つらゆき
（手 後撰 官）
まつみにもかくしのひえのみなとつゝ人をまつらん渚松
（朗詠 交友）
誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
おきかせ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181
ガラス使用

万九　家 古今三　家 六帖　素　万十九　家

わかせこかつかひこんかといてたちのこの松原をけふかすきなん　人丸

風ふけは浪こす磯のそなれ松ねにあらはれてなきぬへらなり

（うつきしの松なれや 詠）（三句以上古今作者而不知）

躬恒　清ゆき

いろかへぬ竹の色の深みとりそ秋なれとわきてもみえける時そなかりける

松ゝのおもひちりふくかたはしらぬかにあさ風ふけは竹のよそなる

竹

我やとの竹のはよりも風にそよくかけはせゆくかれ　やよひ

ちよふるへき竹のよはひをかきりなきまつのこゝろのとこしなへなる　貫之　よみ人

日　日　古　未考　家　素性歟 兼輔歟 貳（朗詠 可考）

（風雅 兼之）みよしのゝ山の雪は降とも竹の葉にかゝる霜の消ぬかきりは行

紀のくにゝよる世のなかに竹のはしにかゝる雨のふるさと　（うつるらん）　みつね

今更になに生ひいつらん竹の子のうきふししけき世とはしらすや　（とくしや）　みつね

世にふれはことの葉しけきくれ竹のうきふしことに鶯そなく　よせい

（新古今 兼輔）（朗詠）木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしにわか身はなりぬへらなり

（冬やれは）かくれ　（若竹 名のみゐかぬれさしけれとめんとさのつき 竹の子のまとかけまくもあるる）　伊勢

（伊勢物語 古本の同詞の こゝの四字を除きての所によつてまつり ちひきの屋風の松の木のちりにそなりて竹よろこふなかく 孟）

竹の葉にすかるたかく梅の花咲きけるをかねてそあらし　（のとかなるしらぬ）　貫之

家六　但如之

万十九　橘左大臣宅　藤原永手　千田大夫

後春上

古春上　同前已出

円　家六

古春上　家六

鶯乃声きくなへに梅の花わきへのそのに咲てちる見ゆ

梅

拾春読人しらず

袖たれていさ我そのに鶯のこつたひちらす梅花見んよ

閑院左大臣

たをりつるよそひつる袖梅の花にほひを我やとかめん（こゝろもそめん　後）

東三条左大臣

鶯のかさにぬふてふ梅乃花折てかさゝんおいかくるやと

貫之

くるとあくとめかれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらん

おなし人

今年より春しりそむる梅の花ちるといふ事はならはさらなん

古春上　家六

家

円

円

円

古春上　家六

梅花にほへる時はくらふ山やみに越ゆれとしるくそありける

風春上

梅の花咲ともしらすみよしのゝ山に友まつ雪のみゆらん

梅の香は袖にうつしてとゝめては春は過ともかたみならまし

貫之

我宿にあかぬと見えし梅の花あかぬ時にもなりにける哉

躬恒

拾春

梅かえにふりかゝりてそ白雪の花のたよりにおらるへらなる

躬恒（貫之歟）

拾新春

かをとめていをつる袖も我宿の梅にこそ春の風はきにけれ

凡河内躬恒

朗詠春夜

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるゝ

家 貫之集下

新勅春上

いつまてかやまとて梅の花をらましとおもふよにしまてる 八日宮

家 梅かゝよ吉のみれいつれる花かはるてわてかさん

たゝくよ 新勅

貫之

日

拾春

ふる雪に色もまかひぬ梅の花かにこそにたる物なかりけれ

貫之

家 家集

同

かをとめて誰おらさらん梅の花あやなし霞たちなかくしそ

躬恒

古春上 家 家集

梅の花咲にいまこそみれ萬代にかはらぬ色をいかてみせまし

躬恒

月夜にはそれともみえす梅花かをたつねてそしるへかりける

素性

後春上 家

梅乃花よそなから見んわきもこかとかむはかりの香にもこそしめ

ひし家　かうくと宮　也家

おなし

古春上 芝方

ちるとみてあるへき物を梅花うたて匂ひの袖にとまれる

家

うたてうたゝといふ忍歯王の事をうたてやうこといへり 又日本紀に奇偉とかきてあやしとよめり もろ別 梅別梅に通して 又 古事

紀下雄略天皇段云於明旦未日出時忍歯王以平心隨乗御馬到立大長谷王假宮之傍而詔其大長谷王子之御供人未寤坐早

可白也夜既曙訖可幸獵庭乃進馬出行尓侍大長谷王子之御所人等白

宇多弖物云王子宇多弖三字以音故応慎亦宜堅御身

宇多弖ニモ又別様ノ心アリ又ウタテトウタヽト通セシコトナキニモ非ス

古春上 素性

よそにのみあはれとそみし梅の花あかぬ色かはおりてなりけり

万八

坂上郎女

ややうつ かわちり宮

さか月に梅の花うけておもふとちのみての後はちりぬともよし

家

いせ

後古春上

ちりぬともかをたにのこせ梅の花恋しき時のおもひ出にせん

古春上 家

とものり

朗詠 紅梅

君ならて誰にかみせん梅の花色をもかをもしる人そしる

万十

いつしかも此夜のあけなん鶯のこつたひちらす梅の花みん

のわくひ 万

本考
万八
貫之集
貫之集
同 後春上 躬恒
日本紀 顕宗天皇 御歌

我宿乃梅のたちえや見えつらん思ひの外に君かきませる

霜ゆきも白雪乃梅の花也下風に吹ちらされゆめ
出すかい
大伴の三林 元

新千春上元輔 元輔集ニ載
雪とのみあやまたれける梅の花紅にさへ似たる也けり
くれなゐにも雪にも見ゆる梅の花にほひはかはらさりけり

貫之

於物名 こうはい
紅に色をはかへて梅の花かそことにほはさりける
鶯の巣くふ枝を折つれはこうはいかてかうまんとすらん

柳

いなむしろ河そひ柳水ゆけはおきふしすれとその根はうせす

貫之集 忠岑伝己出
同
同
同載 伊勢集季縄 下新古出 伊勢腰句有変
同載
同
古春上 貫之

いろはの緑をよりて青柳のいとの絶えすも見えわたるらん

風春中 貫之
春の日の影そふ池の鏡には柳の眉そまつは見えける

よる人もなき青柳の糸なれは吹くる風にかつ乱れつゝ

貫之

新勅春上伊勢 朗詠雨伊勢
青柳の枝にかゝれる白露を糸もてぬける玉かとそ見る

みつね

新古春上
春雨乃ふりそめしより青柳の糸のみとりそ色まさりける

おなし

後拾春下 躬恒
あさみとり風にみたるゝ青柳のたえくかまそへて花にちりける

遍昭

朗詠柳
青柳乃糸よりかくる春しもそ乱て花のほころひにける

後春中 家六載 伊勢
家六載 貫之集載之
家 上巳出貫之 晩今有之
赤染
万十
赤染
古春上 読人不知

（貫之集詞書ニハ柳の枝をひろてさそう 屏風の後ろ）
青柳乃糸よりかけてをるときはいつまで山の鶯ぞなく
へんせう

（新千春上 後京極摂政）
花見つゝゆくとも青柳のいとよりかけてみだれあひつゝ
いせ

（新和春上伊勢 朗詠）
青柳の枝にかゝれる春雨は糸もてぬける玉かとぞみる

春雨乃ふるにはあらで青柳のまゆに文付てむすぶ

あさみどりいとよりかけて青柳の糸の心はよるかたもなし

見る人も隠れる青柳のいとのあやかときをかけてる

はるくし

石走る瀧なくもがな桜花手折てもこん見ぬ人の為
つらゆき

家
以上八首家
古春下

（新古春下貫之）
我宿のものなりながら桜花ちるをばえこそとゞめざりけれ
（作）これより
貫之 廿五首

百千鳥ひとつらをぞ桜花いつまでの春をみさしん

（新続古春上）
うちみても行るゝ桜花まだみぬ人もなそまされ

むかしより桜ちらすは春のあらしやに

絹かけていもが袖まで桜花みる人ごとにちりやゆく

（続古春下）
かくてあるぞとおもひし桜花散るらん後ぞなをぞ恋しき

桜花ちるをおしまぬ春ならば心のどけき思ひあらまし

春はそこ雪とみえける白雲は桜の花のあとにぞ有ける

桜花ちりかふまでもみる人の心のどけき雪ともがな

あかなくに散るとや花の桜花みる人さへやちらむとすらむ

家六帖 人とよに折らるゝ時は桜花[illegible]心こそゆけ

後春下 白雲とみえつる物を桜花今はちるとや色ことになる

家 桜ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そふりける

日 ちるとみて[illegible]桜花[illegible]

家六帖 それとなく[illegible]桜花[illegible]

家 桜より[illegible]

みつね

家漏く 今まては[illegible]桜花[illegible]

後春下 いは[illegible]桜花[illegible]

桜花[illegible]

古春下 雪とのみふるたにあるを桜花いかにちれとか風のふくらん

家六帖 風[illegible]桜花[illegible]

家 うつ[illegible]桜花[illegible]

未考 折[illegible]桜花[illegible]

これのり

家六帖 [illegible]桜花[illegible]

[illegible]

日 桜花[illegible]

友則

古春上 いろもかもおなしむかしにさくらめと年ふる人そあらたまりける

日春下上も己出 二そ 並家 久方のひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらむ

素性

家 古春下 読人 家

まてといふにちらてしとまる物ならハ何を桜に思ひまさまし
ゆかし

家 古春下 承均法師

いさ桜我もちりなんひとさかりありなハ人にうきめみえなん
[illegible]

家 古春上 中右花已出

（朗詠 花）みてのみや人にかたらん桜花（山さくら 朗）手ことにおりて家つとにせん
そせいほうし

同春上

桜色に衣ハふかく染てきん花のちりなん後のかたみに
[illegible]のこと

同春下

はくゝ花ちらふらん（ら）ひともとはよきて心のまてしみるよ
[illegible]

同 貫之

春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにもみるへき物を

---

たれこめて春のゆくへもしらぬまに待し桜ハ（も古）うつろひにけり（へ）
よるかのあそん（のすけ）

枝よりも（よつ古）あたにちりにし花なれハおちても水のあはとこそなれ
すかのゝたかよ

以上三首同.

春雨のふるハ涙か桜花ちるを惜まぬ人しなけれハ
黒主

同春上 家 中右閏月已出

（朗詠 閏月）桜花春くはゝれるとしたにも人の心にあかれやハせぬ
伊勢

同 家

みる人もなき山里の桜花外のちりなん後そさかまし
いせ

家

[illegible]散らん物ならハ花ちりて（く言）[illegible]

円
風まつてちらぬ桜花心にまかせてまきもせく

古春上 伊物
なりひら
けふこすハあすハ雪とそ降なましきえすハありとも花と
見ましや

万五 家 六載
人まろ
桜花あたひらても鶯のうつせも我心ハなくよ

円 古春下 読人不知
よみ人
春霞たなひく山の桜花うつろはんとや色かはりゆく
さくらをは 宮

円 古春上 伊物 土佐日記 家
なりひら
世中に絶て桜のなかりせは春の心ハのとけからまし
朗詠花
あくりさとく 古家 伊朗

万十六
いもが名にかけたる桜花さかハ常にや恋ひんいや年のはに
用者百 さくらハ百ヶ年

未考
春雨にあひく咲る桜花常よりも濃く見えるかな
貫之集 雨ふれハ色さりやすき花桜うすきかへにしほるゝかな

---

古物名 かにはさくら 貫之
天木四 寺にて人々花桜見 是風 かのたちへいきてうすかみをかめのひと花桜つゝみひろう
かにはさくら
かつけとも波のなかにハさくられて風ふくことにうきしつむ玉
つらゆき
和名集云 玉篇云 樺 戸花胡化二反 和名加波 万葉 樺皮上手てかはとよめり 又加仁波 今桜皮也 源氏玉葛の卷のかにはさくらの咲みたれたると
うつほ物語 花桜のいとおもしろき 唐后の母 うは花桜とよめるは桜の名也

家
花桜いろてる人のかさしそへみなれしそめてまさる春哉
見宮

未考
ちりさくら我ものしらす道にはなれ露はかくるもなかりける
ひとなくる

日
花桜今さかりなるあふりかさしてもいはんからるともなし
万十 梅花 今さかりなり かさしつゝとも今 めてたく 日家の袖
山さくら

日
山ともふ見ゆる桜のめくりぬ程はおもひそめてやちるもいとはむ
一万ヤ八そ 桜も いつのかたにや
貫之

古春上 家 六載
桜花咲にけらしなあし引の山のかひより見ゆる白雲
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

古春下
山たかみ見つゝわかこし桜花風は心にまかすへらなり

同春上
二冬共家家数
誰しかもとめて折つる春霞立隠すらん山の桜を

つらゆき

古六二
家
越の月は吉野の山の桜花人はしくれの雪そまかへる
やわらかん家

みつね 三首

三冬並家家数
霞とのみ見えくや梅の山の山桜花の思ひくらんのあくる雨を

山桜峰ゝくる風のめ通れは花乃心しまし人すかく

とれ
と官
ちるときふあたまゝ松山桜まつ一めゝ花のつきさえ

友則

古春上
家
みよしのゝ山に咲る桜花白雲とのみあやまたれけり
雪かとのみそ古
ける古
後撰下 三よしのゝよしのゝ山の桜花白雲とのみ見えまかひつゝ

忠みね

家
古恋二
我恋はそく梅乃山花桜花まれにちらすはかもとは見えし
そ家

遍昭

後春中
いそのかみふるの山辺の桜花植えけん時をしる人そなき

素性

同
家
山守はいはゝいはなん高砂の尾上の桜折てかさゝん
は

躬恒

古賀
躬恒集
山たかみ雲ゐにみゆる桜花心の行て折ぬ日そなき

万八
新古春上赤人
足曳の山桜花日ならへてかく咲たらはいとこひめやは
しさくらいは万

にはさくら
和名云朱桜 本草云桜桃一名朱桜 和名波々加一云迩波左久良
かくはあらしも今は度々あり桜哉

近江御息所歌合歌
拾春読人不知
朝ことに我はくやとの庭桜花ちる程はてもふれて見ん
あさことに をはらふ家
あさことよ
まそて官

もさくら

みつね官

近江御息所歌合
古今
万
同十九 家持
同
未考
雲之集
家
縄丸

夫木 拾遺集 新撰集 家歌
梓弓春山近に煙たちまよひみえぬはさくら花
あから　人まろ
新撰集 我宿の池の藤浪咲にけり山郭公いつかきなかん
我宿の池の藤浪咲にけり山郭公今やきなかん　いつか古
あか人
恋しくはかたみにせんと我宿に植し藤浪今咲にけり
藤浪のかけなる海の底清みしつく石をも玉とそ我見る
拾遺 人丸
多祜の浦の底さへにほふ藤浪をかさしてゆかん見ぬ人のため
水底に影さへ深くしてさゝ浪かゝれる岸の藤浪
後古春下 家之 朝 拾遺集 藤の花
うつし植し松の名をしもあやなくもかゝれる藤の底にて
丹波大夫　ちさと
我やとの人まつやとはいふかけつる池の藤浪かはりてそちる

同
同
家集
同
同
古春下 家之歌

右は家集家今 上東門院 秋ちきの
拾遺 紫の藤さく松のこすゑにはもとのみとりもみえすそありける
藤乃花ありとも見えむしら浪のたちはしるらん松のうれ
なりひら
新古春下 貫之
みなかける松にかゝれる藤浪のちとせをかねて花咲ける
躬恒
すゑてのこみんつるきのよかしはらすゑきはまけ藤浪
おなし
世をしらぬたちなむさきの池の底かはしる藤なみ
おなし　不審
あやとはきけり藤浪たちかへりそのこしへの人のみえん
道明

古春下
家

家〻載
後春下 後人家
伊勢集

百六

家

日

未考

よそにみてかへらん人に藤の花はひまつはれよえたはおるとも

おなし人

我宿の池の藤なみさきにけり山郭公いつかきなかん
（若伊勢にあわせて一本よみ人しらす）

たちかへるか

立かへりみる人ことに花さくら枝にやとれる雪かとそみる
（そけとなりしところのあと）

貫之

宿ちかくうつしてうゑし花なれはかくしまほしき家のうちかな

たかし

としことにをしむとおもへと花ちれはやつれて人のこゝろかはらん

こゝろ

郭公たまさかにのみくる宿のゑ橘のさかりまてとや

百八

日

伊勢集 家載
伊物
古今 後人家

日

日 後人家
伊勢集

百六

日十 作者未詳

やすら

わかやとにきみしたのしもみんとてや宿の梅

伊勢 かちとて

大かたの花さくれのなかに春のむかしの人乃袖のかそする

（朗詠 花橘）

（後 立のなよこしきひとの袖そとゝの花橘）

子 里

さつきまつ花橘のかをかけはむかしの人のそてのかそする

（万六 巻六 右大臣 安倍御主 故豊島 作せき）

五月まつ山郭公うちはふき今もなかなんこそのふるこゑ

よみ人しらす

はなたちはなのかほりやとるらん

まれにくる人をまつとてわかやとの花橘はちりすきにけり

あへりちるき

万十一
万七　作者未詳
日十四
未考
万七　下椿え出
古大和[illegible]
万十
日

わきもこにあはて久しくむましものあへ橘のこけむすまて
しゐ　　人丸
かたをかの此むかひのをに椎まけは今年の夏の陰になるらん
[illegible]のしひのこやて[illegible]（四比乃故夜提）
わかやとに[illegible]の中たちてつえのむら[illegible]らん
さくろ（海石榴ハ日本紀も万葉も椿と下ニ椿ニ入へし）
あしひきの山さくろさくやつをこえしゝまつ君かいはひつまかも（山海石榴）
なし
[illegible]
[illegible]
[illegible]

---

近江国息長[illegible]合[illegible]
万十
日七
日十九
万十九
古物名李花[illegible]
古物名　杏花

山なし（和名橘子 陸詞切韻云橘音離 和名夜末奈之 山梨之）
世中はうしといふともいつくにか身をはかくさん山なしの花
もゝ
我宿のけもゝの下に月よさし下心よしうたてこのころ
はしきやし我家のけもゝもとしけみ花のみ咲てならさらめやも
春のそのくれなゐにほふもゝの花したてる道に出たつをとめ
すもゝ　　やかもち
わかそのゝすもゝの花か庭にちるはたれのいまたのこりたるかも
今いくか春しなけれは鶯も物はなかめて思ふへらなり
からもゝ　　ふかやふ
あふからも物はなほこそかなしけれわかれんことをかねて思へは

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181
ガラス使用

くるみ　　　つらゆき

あちきなくくるみを見れはいたけれとよきにくるみえ地をむすふらむ

すき

古雑下　読人しらす
新古今　門己出　拾遺

わか庵は三輪の山もとこひしくはとふらひきませ杉たてる門

家
つらゆき

いかにせむしとむへくもなき三輪の山みるとはいへと杉さしたる

未考

あまれはいともりしてん三わの山まつ杉たてる門をこそしれ

万十

石上ふるの神杉かみさひてこひをやさらにあひにけるかな

日九

神なひのみむろの杉の下枝まてこゝろもすきのはけしき

日十四　作者未詳
人丸

わかせこかやまへのやまのすきもとをうつりにけりなひの木の本

むろ

万三

磯のうへにねはふむろの木見し人をいつらとゝはゝかたりつけなむ

日十五　古今六帖　昔逢人已出

ときはなるむろのやしろのむろの木はとこよに今もしけりけるかも

楸

万十

なみまよりみゆるこしまのはまひさきひさしくなりぬきみにあはすて

古賀

ちはやふるかみのみまへのひさきこそむかしのまゝにしけりけるかも

万七

あしひきの山の楸のはをしけみとゝめしあとをみれはかなしも

桂

後春上　貫之

春霞たなひきにけり久方の月の桂も花やさくらん

万四　伊物

めにはみてゝにはとられぬ月のうちの桂のことき君にそありける

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

万八
同
家六卅
赤人
同
万十
後雑一 躬恒
躬恒集
後雑三 敦忠
敦忠集

かうかのき

ひるはさきよるはこひぬるかうかのき君のみみめやわけさへにみよ
（万葉の書やう和訓をよしとす）（ねふのはな万）（合歓木花万）

わきもこかかたみのかうか花のみにさきてけたしくみにならしかも
（ねふのき万）（合歓木者）（蓋）

あふち
（近江にある名所あふち）
貫之

我宿にあふちの花はさきにけりしもわすれしものをまちけり

五月雨に恋もとけやまぬてしそ君にあふちの花はさきける
（五月ハ恋に乏しき月なり）

五月雨とおもひつる時は今あふちの花は家に咲くらむ

わきもこにあふちの花はちりすきて今さけることありこせぬかも
（ありこせぬかも万）

かし

足曳乃山ちもしらす白樫のえたもとををに雪のふれれは
（まさ）（とを）

しらつゆの神宮の山のしらかしのあるまてに人かよふへきまたかよしかへ
（よ後）

六ノ五十六

万四
同一
万七 上石坂王
同十九
同廿

くぬき

はつせ川乃岸におふるわかくぬきのまてかみそまつときゝはたるらん
（のつきの万）（之宮能小歴木）（そくぬき今按）（しえ）（あからそ万）（莫川鳥）（まさ）

しらかくるらん
（祝言）

椿

阿引乃山椿咲やつをこえしゝまつ君かいはひつまかも
（あしひきの万）（足疾之山海石榴）（咲く万）

河上乃つらつら椿つらつらにみれともあかすこせの春野は
やかもち

おく山乃やつをの椿つはらかにけふはくらさねますらをのとも
おほきし

あしひきのやつをの椿つらつらにみるともあかめや植てける君
（乃七見）

かしは

万六　同十六　古雜上　読人不知　万十九　同　未考　同

いなみのはあかしも乃と見かあれと君まよ[illegible]をあはれなれは[illegible]

かよふ心乃こ[illegible]かくしてかくてかくしもかしも[illegible]

[illegible]心は心ならすして[illegible]

かゝかしらん

我せこかはけくもあるやうしもあるかあらとき

僧恵行

やまもちる[illegible]

すゝきのみよしえやすゝ酒のゆといはそのゝ[illegible]かしらん

なりあかしらん

人のよるらしあかしもハ[illegible]乃[illegible]のそこ[illegible]

流らし

[illegible]乃[illegible]浦乃[illegible]流れの花ハ[illegible]

人丸

万九　作者未詳　未考　万七　[illegible]　万十一　同十　万七

たくひれの鷺坂山乃白つゝし我ににほはね妹にしめさん

岩つゝし

思ひ出る[illegible]山の岩つゝし[illegible]

山越て遠津の濱乃岩つゝし我くるまてにふゝみてあり[illegible]

[illegible]通ハ[illegible]岩つゝし[illegible]そのまゝあらんや

[illegible]

波乃[illegible]小嶋乃濱[illegible]

あし[illegible]

くもん

[illegible]の[illegible]の[illegible]

後撰四　忠房

うちまゐの[illegible]　こゝろさへや

躑躅 初名

[illegible]つゝしかり

令法

（くち、庭よくつやといふ詞をもくさるれ）

（夫木廿九 家集 或人令法と云物をおこせてこれかくいひやりける 能因法師 今よりはこころくれぬるつりりやうぶ[illegible]）

神[illegible]いかんとよは[illegible]つゆ[illegible]

未考

しきまたん

万七

おく山の[illegible]花乃なのとや思ひつゝ君を恋わたるらん

あせみ

以上三首万十

蛙鳴吉野の河の瀧乃上のあせみの花そてにふれてそゆめ

わかせこにわか恋ふらくハ奥山の阿せみの花の今さかりなり

まえ山乃あせみの花のかく[illegible]君[illegible]

万七

山ちさ

（近江のや[illegible]山ちさのはなつらちやしなさ[illegible]）

いまは我[illegible]山ちさの花しも君か[illegible]らん

六ノ五十八

万十一

山ちかき白露[illegible]花[illegible]

我ならぬ人[illegible]白雲[illegible]

未考

ゆつるは

（夫木十二 雑四 ゆつるはかけるの[illegible]）

万十四

あともへか阿しくま山乃ゆつるはのふゝまる時に風吹かすかも

かたかし

（万云 攀折堅香子草花歌一首）

家持

万十九

武士乃やそをとめらかくみまかふ寺井のうへのかたかこの花

つちはり

同

[illegible]のかはなかれとも[illegible]

万十

あをやき

阿保山

ま[illegible]のさねこみ花ハ今もとも君を[illegible]みる人[illegible]

散乱

とり

万二
いかにへ波あかるとかましゆつるまはらめのうへの浦瀬か行

古恋三　読人不知
村鳥乃立にし我名今さらにことなしふともしるしあらめや

未考
冬山はふきのあつる鳥の鳴を人はきけるはなにそまとふ

万七
鳥まいあましか見ましお隠遂おて帰遂てる鳥よ我かまうしを
（玉恋四　石上ここあらむ）（こつらひて玉）（わひしらろまらみまし　あと玉）

言之集　石見守
夏そひくうなかミの真津はとよ鳥なきさけと君はきまさす
（かの本　奥）

後恋三　花山院御製
葦かものむれゐる江の芦ほかよし我まある鳥なれてそこそ見
（後拾三　序之）

万十
鳥よかける鳥ともへとみえてしれ恋るまれすはてとらふてく
（とろし石　取石）（そ後）（りしろく秋とめ一下）

未考
妹かもまとみえ池の波ゐる島の色雪の明そ立ぬ
（夫本日作分上住万十）（秋とめし　夫本かこ）

そよみとか
友なる島ゆゑてときそ我家追ひけるまてこそ我もし
ひまとか　なかりし

東六載
ひとりぬるとこはかそれはかこなきにそれはすこれかなきわれを
のこそなく

未考
明ぬとて行いそく鶏のにこてなる我かまやはあかぬ
（翔）（鶏乃雛）

円
春の野に雉の妻恋に己かありかを人にしれつつ
かとひ
（雉乃雛）（其後よ歌ありめの文）

円
あしひきの山のひとめくつるすまふ流のまかひてぬ身とや成なん
（かかるよ行し）（勢）

円
鳥の子はかへりて後そるしろ身のかひなる花とさそひしはの
流る
（古見集）
貫之

泉
河風のよるのうちなき君を見に浪はよせすや恋よまさらん
（のまふ）
たてまし

円
おとせぬをとわかせてなつよりし河の音遠る山の鳥のえまけき
（新千載恋之）

古拾上　東之
あしひきの山のそてる河の瀬の風は夜もなく成をそてこそ

貫之集　家　同　未考　万十一　同十五　未考　万六

むれてゐる河しの[illegible]浪の色かとそみる
貫之

千とせまて命まてる鶴なれは霞ゆき[illegible]
いせ

あさとはかるに[illegible]あし河のまてに鳴鶴ハ[illegible]

きせはの[illegible]にはなやさかりん[illegible]河のみなはかりけれハ

あま雲によねうちつけてとふ鶴のたつたつしかも君しまさねハ

たつかなきあしへをさしてとひわたるあなたつたつし獨さぬれハ

あし河のすむ沼に[illegible]葦の[illegible]
赤人
とのゆくて

続古雑中
わかの浦に塩みちくれはかたをなみあしへをさして鶴鳴渡る

同十一　作者未詳　古秋上　読人不知　同　読人不知　未考　万十　作者未詳　人丸集　古秋上　菅根

芦田鶴のさはく入江の白菅の[illegible]てもや君ハ[illegible]
人まろ

かり

いとはやもなきぬる鴈か白露のいろとる木々も紅葉あへぬに
人丸三首

春霞かすみていにし鴈かねハ今そなくなる秋霧のうへに

いやしくとまた鳴鴈か白露の[illegible]秋ハ久き物を

新古秋下人丸
かきほ
芦なる荻の葉そよき秋風の吹くるなへに鴈鳴渡る

すかねの歌

秋風に聲をほにあけてくる舟ハあまのと渡る鴈にさりける
菅根

万八
同　但馬皇子
未考
後秋下　貫之
家漏く
家
後秋下　読人不知
家二載
家二載
古恋五　貫之
貫之集

久堅のあまくもかくれなきそゆける早田かりかね
ことしけき里にすまずはけさなきし雁にたくひてゆかまし物を
鴈[illegible]秋の紅葉を[illegible]
貫之　四首
[illegible]は山霧立分てくる雁の千世に[illegible]
あくと[illegible]かりの[illegible]
[illegible]月日[illegible]初雁[illegible]秋[illegible]
[illegible]初雁の声[illegible]
初鴈のなきこそ渡れ世中の人の心の秋しうけれは
春[illegible]雁[illegible]
みつね　四首

---

後秋下　躬恒
家二載
後秋下　読人不知
家二載
躬恒集
古秋上　躬恒
同恋一　同
同春上　家
後秋下　読人不知
家二載
家
万十　作者未得

[illegible]雲路[illegible]くる雁ハ心[illegible]
天の原[illegible]
古里に[illegible]雁ハ緑の空や[illegible]
うきことを思ひつらねてかりかねのなきこそわたれ秋の夜な〱
初鴈乃はつかに声を聞しより中空にのみ物を思ふかな
伊勢
春霞立を見すてゝ行雁ハ花なき里に住やならへる
[illegible]雲[illegible]
よみ人しらす
秋風に山とひこゆるかりかねのいやとをさかり雲かくれつゝ
人丸

古秋上　万十九　伊物　同　未考　万十　同八

きかな

まつ人にあらぬものからはつかりのけさなく声のめつらし

新古秋下　深養父

なく鴈の音をのみそたく小倉山峯たちならす時しなけれは

まちかけて鴈のなくなる秋風にやまとの山を越さらめやは

続後拾　恋三　読人不知

みよしのゝたのむの鴈もひたふるに君かゝたにそよるとなくなる

同　業平

わか方によるとなくなるみよしのゝたのむの鴈をいつかわすれん

月さえ小を[illegible]人の[illegible]雲ゐに声[illegible]

うくひそ

名寄　万北　六帖　鶯　わくこ　うくひすの谷とこゑてゆくとつれはあさひの[illegible]

赤人　二首

打なひく春さりくれは篠の葉に尾羽打ふれて鶯なくも

くたら野の萩のふるえに春まつと居し鶯なきにけんかも

---

赤人集　万十　作者赤人　同　同　同八　同十九　家六載　古春下　読人不知　同　新後撰集六載　新後　家六載　古春下　読人不知　同春上　素性　家　業平

風春上　読人不知

梅のはなさけるをかへにいへゐせはともしくもあらし鶯の声

打はへて春さりくれは柳の枝くひもちて鶯なくも

うちきらし雪はふりつゝしかすかに我家の苑に鶯そなく

春日に霞たなひきうらかなし此夕かけに鶯なくも

見つね

うくひすの音[illegible]山里

吹風をなきてうらみよ鶯は我やは花に手たにふれたる

しるしなき音をもなくかな鶯はことしのみちる花ならなくに

家持　二首

待人はこぬ物ゆへに鶯のなきつる枝を折てけるかな

春たてハ花とや見らん白雪のかゝれる枝に鶯のなく

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

古春上　友則
新古亭子　春風至
亭子　興風
興風集　無

古春上
千里下

後春上　読人不知
伊勢集

同春下　素性
素性集　上乙

未考

とものり

花の香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

新古雑上　亭子院歌合　興風
後古春下　亭子院歌合　なかれ見る花のかとも

きのふまてあめ花のちるをとてやちらんなきてをそき

千里

鶯の谷よりいつるこゑなくは春くることをたれかしらまし

とものり

梅の花ちるてふなへに春雨のふりそほちつゝ鶯のなく

そせい

行かへりやとりはせても鶯はなくまはいつか朝にはふれそ

こつたへは　古今春上下の句に

鶯のおのか羽風にちる花をたれにおほせてこゝらなくらん

春すきて心もゆかぬ鶯は花ちりぬるを惜のこゑそする

---

古春上　読人不知

同雑体　同
敏行集

後春上　読人不知

未考

古春上

同上

同

同

同十九

未考

梅かえにきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ

むめの花見にこそきつれ鶯のひとくひとくといとひしもをる

大和物語

鶯のなきつる声にさそはれて花のもとにそ我はきにける

我宿にきゐる鶯はねよはみちるとも君は花にそける

二條のきさき

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙今やとくらん

春たてはかすみのうちに花なれやあさかせにさそふ鶯のこゑ

春あけはつまとひかぬる鶯の梢をつたひなきつゝそふる

後拾遺春上　読人不知

名かくれ春さかくれは深谷のあさまに鶯のなくねをそきく

法宮せ春の行のをやしみは鶯はなくなるまをと雪はふりつゝ

ももくさの花のつほみに春はくれとも山はまたふく鶯なくなる

未考　同　万八 刀理宣令　同 石上堅魚　同　同

わくきもを

我背子を[illegible]時鳥[illegible]

[illegible]君に[illegible]郭公[illegible]
[illegible]思ひの主

時鳥声きく小野の秋風にはきさきぬれや
声のともしき

武士のいはせの杜の時鳥今もなかぬか山のとかけに

時鳥きなきとよもす卯の花のともにやこしと
とはましものを

大宰帥大伴卿

たち花のちる里の時鳥かたこひしつゝ
なく日しそおほき

大伴書持

我宿に月おしてれり時鳥心あらはこよひきなきとよもせ

---

同　見作者未詳　同十九　万八　同　古今 貫之 兼万　貫之集　古今 貫之

[illegible]君はまちませ時鳥[illegible]

かきくらし雨ふるよるを時鳥なきてゆくなりあはれその鳥

大伴の[illegible]

[illegible]

家にまうてゝなにをかたらむ足曳の山時鳥一こゑもかな

時鳥花たちはなの枝にゐてなくはむかしの人やこひしき

神なひのいはせの杜乃時鳥ならしの岡にいつかきなかん

[illegible]

夏の夜のふすかとすれは郭公鳴一声にあくるしのゝめ

[illegible]

五月雨の空もとゝろに時鳥なにをうしとかよたゝなくらん

新古　同　家　同 後撰 貫之　後撰　同　古今 此上三首家　伊勢集 後撰 伊勢　躬恒集

足曳の山の梢しるけれはたゝかくさへも鳴なるらむ

むらとりの峰よりつて千鳥いくそたひをか鳴まとふらん

月夜よみあかもさらへくねの袖を千鳥さへなきわたるかな

夢路にも千鳥さへいねかてに君もゆるかしける哉

以上七首　　　貫之

伊勢　三首

冬隠れにし月出潮に千鳥なくなりまつは枝うつなるよ

千鳥鳴河明る音を空ねてあくあまたねと持如田る哉

さ月にハらすゆかるん千鳥まくらんちとりふく雲の上や

かね　いせとして

二こ絡と空のをハなよハ千鳥鳴なくよ絡も[illegible]ける哉

古今　同 家 業平　同 家　同 同　同 万葉 家

兄川れ

千鳥鳴佐保乃河瀬のさゝれ浪立らん

やむときもなし

くもかくみちに明ゆる夜は殿をあけとやらんとまねく千鳥

いせ

夕さり来る佐保の河霧にまさりける

よみ人しらす

かはくまも霧にけハあるかなしきあま恋する友まとはせる

友則

思やるこゝろはやまさる千鳥鳴ねもゐてなるらむ

みつね

五月雨に物おもひをれは時鳥よふかくなきていつちゆくらん
とものり

おとは山今朝越くれは時鳥こすゑはるかに今そなくなる（こゑぞ 官）
公忠のあそん

行やらて山路くらしつ時鳥今一声のきかまほしけり
ふかやふ

[illegible]郭公なきつ一声にあくる横雲（古今 夏の夜のふすかとすれは時鳥なく一声にあくるしのゝめ）
としゆき

[illegible]物やおもふと時鳥[illegible]
みくにのまち

やよやまて山時鳥ことつてん我世中にすみわひぬとよ
きのあきみね

夏山に恋しき人やいりにけん声ふりたてゝなくほとゝきす
[illegible]時鳥[illegible]
みつね

時鳥なく声きけは[illegible]
[illegible]時鳥[illegible]
[illegible]時鳥[illegible]
[illegible]時鳥[illegible]

## 千鳥

[illegible]河の[illegible]

友則集　未考　万十一　未考　万四　同　未考　拾

（秋冬 友則）夕くれハさほの河原乃川霧に友まとはせる千鳥なくなり

大空をむれてるちとりのなくこゑハいくよのほとにまよひきぬらん

川千鳥すむ河のせに立霧のいちしろくもはあひいひそめてハ

山河の岩かくれ行千鳥なれしれねや磯のまよひぬ

千鳥啼さほの河原乃清き瀬やむまうちわたしいつかかよはん

大伴坂上郎女

（夫木十七冬二）さ夜中に友よふちとり物おもひをと侘つゝをれはなきつゝもとな

おほきみの女郎

いたくしも思ひしれハ川千鳥野にも山にもちるまとひぬる

貫之

（拾冬）おもひかね妹かりゆけハ冬乃夜の川風寒みちとりなくなり

---

万十　同八　古春上読人不知　後春中　万八　同九 作者未詳　貫之集

## 呼子鳥

あさきりにしのゝにぬれて呼子鳥三ふねの山ゆなきわたるみゆ

あかひと　川系信

大伴坂上女

よのつねにきけハくるしき呼子鳥こゑなつかしき時ハなりぬ

遠近乃たつきもしらぬ山中におほつかなくも呼子鳥哉

我宿の花にやなれる呼子鳥よふかひありて春そくれ行よ

春道のつらき

皇女子（鏡王女 万）

神なひのいはせの森の呼子鳥いたくななきそわか恋増る

瀧の上の三ふねの山ゆ秋津へにきなき渡るハ誰よふこ鳥

いつまてかなかんと思ふ宮城のゝあけくるゝ呼子鳥かな

万十　古今読人不知　未考　同　同　万十九 家持　万七　未考　万十二

朝霧や八重山こえて喚子鳥鳴やなかくる宿ハあらなくに

しき

暁乃鴫の羽かき百羽かき君か来ぬ夜ハ我そかすかく

あさなさなさよ更て立鴫のはねしてそしらるゝ独ぬる夜

暁ハ羽かく鴫のうらかなし露寒に[illegible]ねらるらん

あかつきの鴫のはねかき百羽かき[illegible]集てそ[illegible]

はるまけて物かなしきにさよ更て羽ふき鳴鴫誰田にかすむ

かくそ

暁と[illegible]けと[illegible]の[illegible]の上ハ[illegible]しき

夜半の[illegible]の[illegible]鳴て[illegible]

朝[illegible]

---

万十四　以下二首 未考　以上 未考　万十

かくとたによそに[illegible]君そ[illegible]

鶚

みさこゐる[illegible]の[illegible]

[illegible]

もころ

みやまには[illegible]

[illegible]鳥の[illegible]

[illegible]

かにはの[illegible]

日　赤考　後夏 作人家 萬十ノ下夏月　万十　日　赤考

あさなてるまゆくやまのあけほのつまもさかえやいつもてしま鳴
夕附日さすかけてよかけりてみえつゝもつねにみゆくらむ
かきくま

（伊勢集 [illegible]）

（新古今）
しほやきのけふりもさかやことやかきくらしつゝやかきくもりてや
かきくらしのことに月ゆけは夜のうきくもるまをかくる
かくしつゝ

（新古今 [illegible]）
（まつら）
（夫木十七 [illegible] 月 [illegible]）
（題不知山月　曙千里）

よしのゝ山もをみなへしとむらさきもみなしもかれて月そあかのこる
りもと

秋の夜のあはれなるものかなくしもとはらかきのひかるまて
くれふ

（新拾遺 [illegible]）
くもゐなるやまのはにあはれなるこゑするのへの人や消ぬ
流もらぬめ

（後人 [illegible]）

はなくへのあはれなりとおもふにもかつかはりつゝ[illegible]
ゐのなかは[illegible]ゆくなく
（百十九）

右六帖以林家酒井氏蔵本校之畢 文化元年十一月 源弘賢
以青蓮院宮御本校之 又仁和寺本 [illegible] 未得之
朱ハ林本也
今以某宮本 [illegible] 文化四年秋 [illegible]

大同小異別注之

嘉禄二年仲春下旬以民部卿本
書写訖此本有僻事之由被申之旨
又以他本自校合了
同
寛喜二年十二月十九日以入道右大弁
本重校了件本者家長朝臣本云々
前江晋東同圖従四位上源朝臣　在判

校本
よくよく此六帖いろはやうんいつれもくされかくのこ
ゑとけなきゆゑ作者ははしめに書て
はいさゝかめきらひめ作るとさくしらぬもし
あしゝて古人のうたる歌をいやしくいあらため
ぬるにたん作るうへ撰集にしてもぬさきにかゝ
たとらかくし作らさらし新花言葉ほかりく
あるやうやソふやまてたのましきうりとくこ
はうんくんえさやさいまつりし

寛文九己酉年暦吉日

（田中庄兵衛）
吉田四郎右衛門　開
粟山宇兵衛　板

---

本云
永禄二年二月廿日民部卿（定家）以本書写了令数返者也
撰者或説六條宮具平親王又貫之女子等云々
前和歌所開闔源朝臣（家長）在判
寛永二年十二月十九日以入道右大弁本書
写校了件本家長卿自筆本云々
校本奥書
禁裏様御本并一品式部卿宮御本以両本令校合
者也　（数傳写従源本云手）
自閑借余當本謄写之後更校如右紀岡
斯余再借自閑之本写得中可修校訂者

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

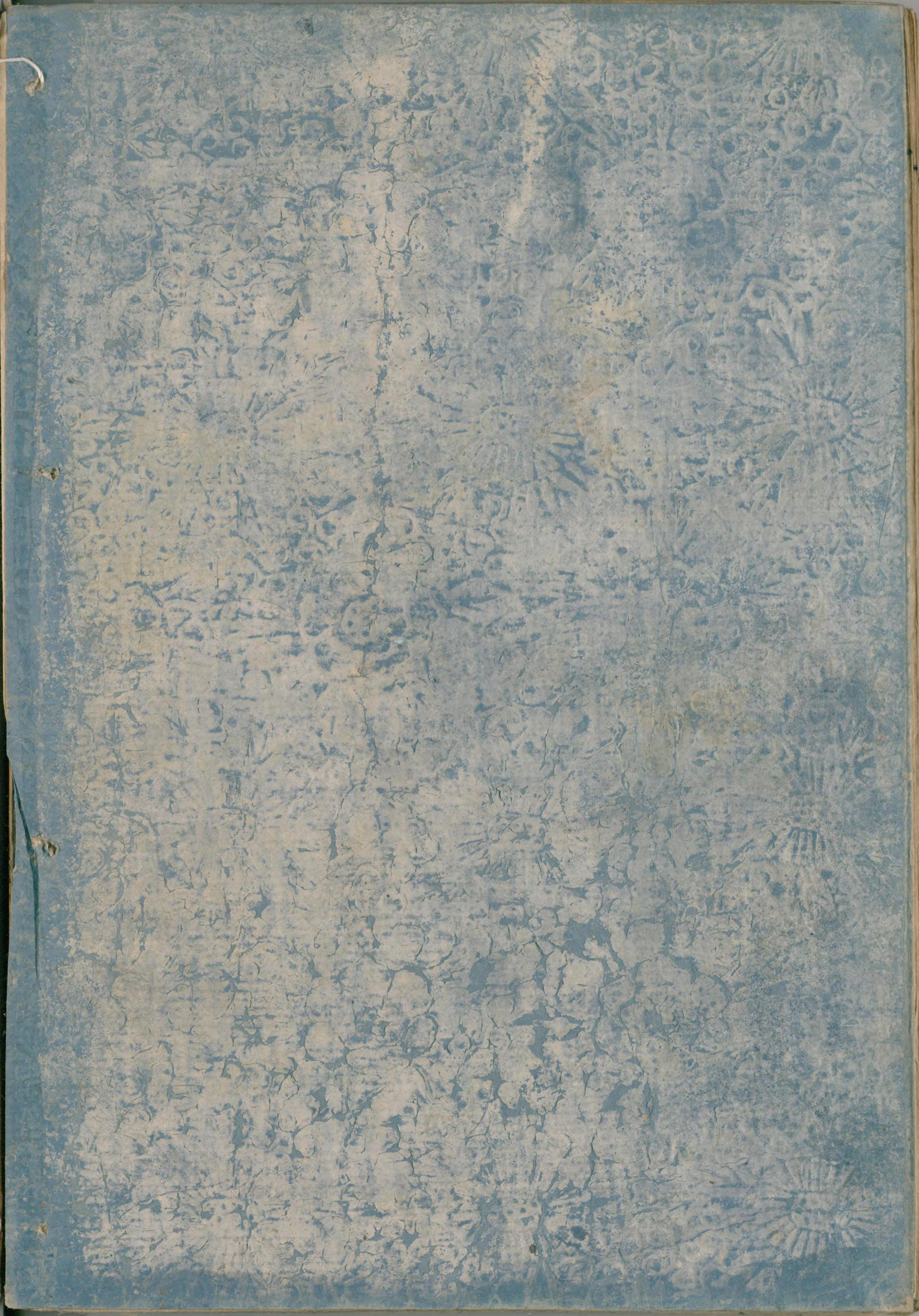
830
6
181

青表紙也
（私云今此本ノ左右墨筆書入本ヲ以テ可知）
元禄丁丑仲秋廿六日竟功
密宗沙門契仲

文化二季乙丑冬之十月於難波[illegible]中一校了

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181
ガラス使用

830
6
181



国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用

帝國圖書館藏

国立国会図書館　タイトル『古今和歌六帖 6巻』 請求記号 830-181

ガラス使用